
ジェノクレスの遺産

桂はじめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジェノクレスの遺産

【Nコード】

N4906X

【作者名】

桂はじめ

【あらすじ】

山奥の村で平和に暮らしていた少女ディアナ。

彼女は、普通の人間と少し異なっていた。

人間の耳の変わりに生えているのは猫の耳。更には尻尾まで生えている。そして何より、この世界では希少となった魔法を操る事ができる。

ある日、ジランディア帝国が村を襲い、ディアナは囚われてしまう。偶然、その村を通りかかった少年アル。

彼は帝国と因縁があり、それを晴らすためにディアナを利用するた

め、彼女を助け出すことにした。
少年と旅を続けるなかで、ディアナの中に眠っている秘密が徐々に解き明かされていく。
様々な人と出会い、助けられながら、真実を解き明かし、強大な敵に立ち向かっていく物語。

f c 2 小説とpixivの方にUPしているものと同一作品です。
こちらに投稿するにあたり、再推敲をかけております。

現時点でChapter2まで執筆済み。それ以降は、まだ執筆しておりません。

プロローグ

「以上が任務の概要です」

青い法衣に身を包んだ男が、静かに落ち着いた口調で告げた。声質からして、青年だろうか。フードを目深までかぶっているため、その表情は良くみえない。男は、やや間を置いてから、さらに続けた。

「この任務は、隠密性を重視するため、足の速い中型の飛空船を使い、単艦で行動してもらいます。目的が達成され次第、速やかに帰投してください。また、任務に障害が発生した場合は、実力をもって、これを排除して構いません」

「……承知した」

四十代くらいの眼光の鋭い長身の男が、青い法衣の男をじつとみすえ、しばし沈黙したあと静かにそう答えた。

真紅と金色の装飾が施された漆黒の全身鎧に身をつつみ、腰に大剣を帯び、群青のマントを身に付けているその姿から、かなり高い地位の人間であるという事がうかがえる。

「飛空船は、ニーナ將軍に用意してもらって下さい。こちらからも働きかけておきますが。同行させる部隊は、現在、シャウルさんに編成してもらっています」

「……………」

その名を聞いて、ラーバスの眉がぴくりと動く。

旧世界の技術知識が豊富な、得体の知れない女。

ジランディア帝国の科学力がこれほどまで向上したのは、この女の知識のおかげだろう。その功績により、帝国内でそれなりの要職に就いている。

「これは、陛下の意向でもあるのですよ？」

青い法衣の男は、ラーバスの表情がわずかに動いたことを感じ取り、静かにそう付けくわえてきた。

コンコンと執務室にノックの音が響きわたる。

「どうぞ」

執務室のドアが開き、中へ入ってきたのは、漆黒の鎧を身に包んだ男。

小綺麗な執務室には、執務用の机と応接用のソファとテーブルが置かれ、奥隅には、この部屋の主の物なのだろう金色の装飾が施された白いプレストプレートと一振りのレイピアが飾られている。

「ニーナ將軍。すまぬが飛空船を一隻、手配してもらえないか？」
マカボニー製の重厚な机に向かい書類に目を通している、長く美しいブロンドヘアの若い女性に、漆黒の鎧の男がゆっくりと歩み寄りながら声をかけた。

「ラーバス將軍……」

ニーナと呼ばれた女性が、手にした書類を机に置き席を立つてつぶやく。

ラーバスの任務の内容は、ニーナの元にも届いていた。

「今回の任務は、本当に陛下の意思なのですか……？」

「さあな……。だが、陛下がああ男を腹心として信頼している以上、家臣である私にとってああ男の言葉は、陛下の言葉に等しい」

ニーナの問いにラーバスは、スツと目を閉じて答えた。

「神官ラジエネア」

ニーナが『ああ男』の名を口にする。

「私には、どうしてもああ男を信用する気になれません」

ニーナは、その強靭なまでの意思の強さと穏やかな優しさを湛えた瞳で、じっとラーバスの目を見つめて言った。

「今、ここで言っても始まるまい……。陛下がそれを望んでいるのであれば、それに対して全力で取りくむ。それが私の武人としての誇りだ」

ラーバスは、閉じていた目を開け、ニーナの瞳を見つめ返して静かに答えた。

「そうですね……」

ニーナは瞳を閉じ、ふうとため息を付く。

「わかりました。先日就航したばかりの『ガラティン』をご提供しましょう。やや小型の軽巡洋艦ですが、旧世界の技術で建造された艦です」

そして、やや間を置いて、

「それから、私の副官のジエイナスも同行させましょう。きっと、お役に立てると思います」

再びラーバスの瞳を見つめなおして、そう提案した。

「……すまないな」

ニーナに対し、軽く頭を下げたあと、

「では、出航準備を頼む」

そう言い残し、マントを翻して執務室から出て行った。

「ご武運を……」

ラーバスが扉の向こうに姿を消したあと、ニーナがそう呟くと、執務室に風が流れ込みニーナの髪をなびかせた。

日常

そこは、周囲を山と森に囲まれた、辺境の小さな村だった。名前をクルトという。

ここには、数週間前に十五歳の誕生日を迎えたばかりの、いつぶう変わった少女が暮らしていた。

少女の名は、ディアナ・シーレン。

村の自警団長の娘で、透き通った絹のような長い金髪から覗かせるのは、人間の耳ではなく猫の耳。

更にしつばまで生えている。

もちろん、全てそれ本来の機能を果たしている本物だ。

何より特徴的なのは、彼女がこの世界では希少となってしまうた『魔法』を使えるということだった。

幼少のころに、他人とは違うその容姿のせいで、同世代の子供たちから苛められたこともあったが、自警団長の娘ということと、何より彼女が持ち合わせている人当たりの良さのおかげで、今では村のみんなから愛される存在となっていた。

今日もディアナは、キッチンで自警団詰め所にいる父へ届けるために、弁当作りに精をだしていた。

昼どきに合わせて持っていくのが毎日の日課になっている。

目的は他にもあるのだが。

ふた付きのピクニックバスケットにキングダムチェックの布をしき、サンドイッチや果物などを詰め、最後に水筒にいれたコーヒーを隙間におさめる。

一人分にしては、若干多いようにも見える。

「ふふ、完成。我ながら美味しそう」

満足げにそう言うと、ディアナはふたを閉め、バスケットを腕にぶら下げて家をでた。

天候は快晴。初夏の日差しが肌を照りつけ、深緑の香りが鼻孔をくすぐった。

クルト村は、人口百数十人程度の小さな村。家屋の数も数十棟しかない。村を南北に分断するように小川がはしり、村の東側にライ麦畑が広がっている。畑に面した川岸に水車小屋が設置されており、小屋の中からは、水力を利用して動く粉挽き機が、ライ麦を挽く音が漏れ聞こえている。

ディアナの家は村の南側あり、自警団詰め所は村の中央広場沿いにある。家から詰め所まで、ゆっくり歩いても七、八分程度の距離だった。

初夏の日差しを浴びながら鼻歌混じりで歩き、すれ違う人と明るく挨拶をかわす。

「お父さん、お昼持ってきたよ！」

元気よく、詰め所のドアを開くディアナ。

詰め所の中は、なにやら物々しい空気に包まれていた。

数名の自警団員が武器の手入れや装備品のチェックをしている。

まるで戦の準備である。

「あら、ディアナちゃん。こんにちわ」

ディアナの存在に気がついて声を掛けてきたのは、自警団の紅一点。背中まで伸ばした黒髪を首の後ろで結んだ、年のころなら二十代後半の女剣士だった。

「アイラさん、これから何かあるんですか？」

「西の森に魔獣が出たとかで、これから討伐しに行くのさ」

そう答えたのは、茶色い髪を肩まで伸ばした端整な顔立ちの好青年。

「ナツク、余計な事は言わないでくれないか？」

もみ上げから顎にかけて無精髭と呼ぶには長すぎる髭を生やした男が、苦笑しながら青年に言った。

「魔獣!？」

ナツクの言葉に、ディアナは目を輝かせ、髪の色よりややくらい色の猫耳と、ライトグレーの尻尾をピンと立てて反応した。

「先に言っておくが、ダメだからな？」

「ま、まだ何も言っていないじゃん！」

髭の男にクギを刺され、ディアナが思わず声を上げた。

「……何年お前の父親をやっていると思ってる？ お前が何を言おうとしたかくらい、容易に想像できる。何より」

ため息交じりで言いつつ、ジト目をピンと立つディアナのしつぽに落とし、「しつぽがしつぽかりと語っているじゃないか……」と、冷やかなツツコミを入れた。

「でもほら、わたしの魔法が役に立つかもしれないよ？」

「あのなあ、ディアナ……」

食い下がるディアナに、髭の男は小さくため息を付きながら、

「ピクニツクに行くわけじゃない。遊び半分について来られても、こっちが迷惑なんだ」

キッとディアナの目を見つめてピシヤリと言いはなつ。

「ハイゼル隊長の言うとおりだよ。何より危ないじゃないか」
ナツクが続け、

「諦めなさい。ディアナちゃん」

アイラがディアナの頭にポムと手を置きながら追い討ちをかけた。孤立無援とは、こういう状態の事を言うのだろう。

「うーっ！ ナツクまで……」

まるでリスが頬いっぱいに餌をほお張るかの如く、ディアナは頬いっぱい空気貯めて膨れっ面を見せた。

「分かったなら準備の邪魔だ。さあ、家に戻れ」

野良猫を追いやるような仕草でディアナをあしらいつつながら、ハイゼルが言った。

「うん、分かったよ……。あ、お弁当、多めに作ってきたから、良かったらナツクも食べてね……」

ディアナは、入り口の扉から身体半分だけ覗かせ、しくしくとさ

ざめ泣きしながらそう言うと、扉の向こうへと消えていった。

「やれやれ、やっと諦めたか……」

扉の向こうに消えたディアナを見送り、白髪が目立ち始めた頭を搔きながらハイゼルがつぶいた。

「良い娘じゃないですか」

アイラの言葉に、ハイゼルは苦笑をかえした。

家路を急ぐディアナ。

ナツクは、これから討伐に向かうと言っていた。

大人しく家で待っている気など、毛の先ほどにも無い。

今すぐ用意すれば、出発までに間に合うかも知れない。

そんなことを頭の中で考えを巡らせながら、帰路を急いだ。

帰宅後、真っ直ぐ自分の部屋へむかう。

部屋に入って左手の壁には、柄頭に剣緒の代わりに赤いリボンが結ばれた一振りの小剣が飾り掛けられる。

部屋に入るなり壁に掛けられた小剣を手に取り、鞘から抜いて剣身を確かめた。

刃渡り70cmほどの両刃の小剣は、数年前にハイゼルが護身用に買い与えてくれたもので、ディアナもたまたまに剣の稽古をつけてもらっていた。

稽古のたびにハイゼルが手入れをしてくれていたし、定期的に村の鍛冶屋で手入れもしている剣身は、まるで新品同然の輝きを放っていた。

ディアナは、厚手の生地でできた白地のチュニックワンピースに着替え、ポーチと剣吊りにベルトをとおして腰にまき、壁に飾りかけてある小剣をさす。

香辛料が入った小瓶を数本、食料棚から取り出してポーチに入れ、自分の昼食がまだだった事を思い出し、ライ麦パンも一つ取り出して頬張り、それを水で胃袋に流し込んだ。

その後、髪の毛を軽くとかし、耳から後ろの髪を後頭部で一つに

まとめてポニーテールを作り、鼻歌を歌いながら手鏡を使ってサイドの髪とポニーテールの垂れ具合をチェックしてから、その鏡もポーチのサイドポケットに収納する。最後にマントを羽織ってディアナの身支度が完了した。

「ちよつと、時間掛かりすぎちゃったかな……」

ディアナは、苦笑ながらつぶやくと、急いで家をでた。

ディアナの心は、完全にピクニック気分に戻っていった。

尾行（前書き）

他サイトでUPしているものの1-2にあたる部分ですが、長いので2つに分ける事にしました。

尾行

自警団詰め所まで戻ると、ブレストプレートを身につけたハイゼルの号令のもと、五名の自警団員が詰め所前で武器や携帯品などの最終チェックを行っていた。どうやら、少数精鋭で行くようだ。その中には、アイラとナツクの姿も確認できた。

「えへっ、間に合ったみたい」
木陰に隠れ、様子を伺いながらつぶく。

ハイゼルが団員に何やら声を掛けたあと、討伐隊が出発する。ディアナは、その後ろを気付かれない程度の距離をあけて尾行していた。

広い村でもないので、森の入り口へ辿り着くまでは、さほど時間が掛からなかった。

村の西端。山に向かって広がる西の森。ナラやブナが生い茂り、加工に適した良質な木材を村へ供給している。森の中にはイレーネ湖という大きな湖があり、そこから流れ出る清流は、村を横断するようにはしり、村の水がめの役割を担っている。また、野生の動植物が豊富でクルトの狩人たちは、この森で狩りをして食料を調達していた。

そんな村の生命線とも言える森に魔獣が現れたのだ。討伐隊が結成されてしかるべきだろう。ディアナが記憶するかぎり、今まで森に魔獣など出たことなど、一度も聞いたことが無かった。だが、好奇心の塊と化している今の彼女にとっては、どうでも良いことだった。

討伐隊は、小川に沿うようにして森の中へ分け入り、獣道を使い奥へと進んで行く。

せせらぎの音がディアナの足音を消してくれるので、彼女にとっては好都合だった。

村を出発してから三十分ほど経過したころには、藪の草丈が顔の高さまでになり、前方が見えにくくなってきた。少し距離を詰めたければ、はぐれてしまいそうだ。

ディアナは、少し焦って距離をつめる。それまで足元に注意を払い、なるべく物音が立たないように歩いてきたのだが、焦りで油断が生じてしまい、地面に落ちていた太めの枯れ枝の存在に気が付かず、それを踏み折ってしまった。

枯れ枝が大きな音を立てて折れる。その音に気付いた討伐隊が立ちどまり後ろを振りかえった。

ディアナは、即座にしゃがみ込み草陰に隠れた。

(危なかったあゝ。焦りは禁物ね……。もう少しだけ距離をおこう) 草と草の隙間から前方を覗き見つつ、冷や汗をかきながら心の中で呟く。

再び行軍を始めた討伐隊を確認し、慎重に尾行をつづけた。

「隊長、さつきから後ろで何か心配がしませんか？」

ハイゼルに駆け寄り、ナックが小声で言った。

「うむ、何か後をつけてきているな」

後ろを振り向かず、神経だけを後ろに向けて答えるハイゼル。そして、アイラの元へ歩み寄る。

「先ほどから、何かが我々を尾行している。あまり、賢いやつでは無さそうだがな。藪を抜けて、見通しがきく場所に出たら、俺とアイラとナック、それぞれが1名ずつ連れて散開し、物陰に潜伏。さつきから我々を付けまわしている何か、藪を抜け出たところで一気に仕掛けるぞ」

「わかったわ」

アイラは、ハイゼルが指示にうなづき、それぞれが誰に着いているかの人選を行った。

それから十五分ほど進むと、三十メートル四方ほどの空き地があらわれた。ハイゼルがすかさず隊員達に散開のハンドシグナルを送

り、指示を受けた隊員たちが散る。
それぞれが木陰に潜み、剣を抜き構えた。

「あっ！」

前方を歩くハイゼル達の姿が不意に視界から消えた。突然の事に驚いたディアナは、足早に藪を突きすすむ。こんな所ではぐれる訳にはいかない。

小走りで藪を抜けた瞬間、

「今だ！ かかれえ！！」

ハイゼルの掛け声と共に、自分へ向かって迫りくる白刃が6つ。

「わ、ちよっ、待っ、きゃあああああああっ！！」

思わず尻餅をついたディアナは、両手で頭を抱え、顔を背けながら瞳を固く閉じて悲鳴を上げた。

「デイ、ディアナ！？」

ナックが間の抜けた声を出す。

恐る恐る目を開けるディアナ。すぐ目の前まで迫った状態で止まっている白刃6つ。

「……………こ、こんにちは、みなさん」

ディアナは、隊員達に向かって弱々しく微笑みかけた。

アイラは、剣を鞘に納めながら藪を抜ける前にハイゼルが言っていた『賢いやつではない』という台詞を思い出して苦笑している。

その他の隊員も剣を納めディアナの事を歓迎したが、ハイゼルだけが何も言わずにジッとディアナの瞳を見つめている。

怒っているのだと感じ取るディアナ。

「その……………、ゴメンなさい……………」

ディアナはうつむき、しゅんとなりながら呟いた。

その姿を見てハイゼルは、小さくため息をついたあとに、我々から離れるなよと言って背を向けた。

「立てるか？」

ナックが優しく手を差し伸べる。

「うん、大丈夫だよ。ありがとう」

ディアナは、少し顔を赤らめながら、ナツクの助けをかりて起き上がった。

「いざとなったら、俺が守るから安心してなよ」

「ありがとう」

ナツクの心強い言葉に顔を赤らめながらも、ディアナは幸せそうに頷いた。

更に四十分ほど歩き、陽が西に傾きはじめた頃には、イレーネ湖へと辿り着いた。

周囲の景色を湖面に映し出し、小波が小さな波音を立てている。

「ここに宿営地を作るぞ」

ハイゼルは、湖の畔から少し離れた場所を指定して宣言した。

その言葉を合図に、隊員達は手際よく宿営地の設営に取り掛かる。

「わあ、イレーネ湖って綺麗な場所だったんだあ」

設営作業が行われている横で、一人暢気な事を言っているディアナ。

「ディアナ、危ないから湖に近づくなよ？」

ハイゼルに言われ、ディアナは幼児じゃないんだからと苦笑を返した。

「ほら、ここまで来たからには、何か手伝え」

そう言いながらハイゼルは、厚手の大きな亜麻布の角から張り出した紐をディアナに渡す。そして、反対角の紐を持ち、亜麻布をアーチ上に組まれた骨組みに覆いかぶせながらディアナの向かい側に回りこみ、紐を足元の鉄の杭に結びつけた。

それを見ていたディアナも、自分の足元の杭に紐を結びつける。

三十分ほどして、石で囲った簡易焚き火台一つと、それを囲うように設置されたテント三基が完成した。

「ん、疲れた！ せっかく綺麗な湖があるんだし、水に足を浸し

て涼みたいなあ」

ディアナは、大きく伸びをしながら言った。

「駄目だ。危ないから近づくなと、さっきも言っただろ」

「足を浸けるくらい良いじゃない!」

「隊長? ディアナちゃんに魔獣の説明をしてないんじゃない?」

理不尽ともとれるハイゼルの言葉に、ディアナは思わず声を荒げる。それを見ていたアイラは、すかさず二人の間に割って入った。

「魔獣の説明?」

聞き返すディアナ。

「この辺りに出沒したらしいんだ。もしかしたら湖に潜んでいるかもしれないだろ? だからハイゼル隊長は、危ないから近づくなって言ったのさ」

「そういう事だ。だから近づくなよ?」

ナツクが説明し、それに付け足すようにハイゼルが続いた。

「うん……」

事情を理解したディアナは、残念そうに返事をするしかなかった。

討伐隊は、宿営地を拠点に南北へ食料調達を兼ねた見回りに出かけ、その間、アイラとディアナが宿営地の留守を守ることになった。

結局、明るいうちに魔獣を発見できず、夕暮れ時になってから、

薪用の枯れ枝と食料を調達して戻ってきた。

枯れ枝を受け取ったディアナは、枯れ草を敷いた焚き火台の中へそれを並べ重ね、そこに手をかざして、頭の中で炎をイメージした。すると、折り重なった枝の下から煙があがり、枯れ木が焼け弾ける音が聞こえてくる。

「やっぱ、ディアナちゃんの魔法って便利ですよねー」

「うんうん。マッチやライターなんて、こんな辺境じゃ手に入らねえっすからねー」

討伐隊の誰かが、そんな事を口にした。

焚き火台の上に吊るされた大鍋の中には、ディアナが作った山菜スープがぐつぐつと音を立て、食欲をくすぐる香りを漂わせている。大鍋の周りでは、ハイゼルが解体した兎の肉を、鉄串に刺して焼いている。

ディアナは、持参した香辛料で料理の味を調べ、レードルでスープを掬って味見をした。

「ん〜、こんなものかな？ ちょっと薄味だけど我慢してね？」

そう言いながら、木の器によそって隊員達に渡していく。

「そういえば、前から気になっていたんだけど、ディアナちゃんが魔法使うときって、ただ念じるだけなの？」

スープを受け取りながら、ふと思いついたようにアイラが言った。「念じるっていつか、イメージを膨らませてるというか。それがどうかしたの？」

キョトンとしながら、ディアナが尋ねた。

「うん。魔法って大地、風、水、炎の四大元素の上位精霊に、力を貸してくれるよう語りかけた結果、具現化される現象だって聞いた事があったのよね」

「へえ、そうなんだあ」

アイラの説明に、ディアナは素直に感心する。

「まあ、今じゃ魔法を使える人自体が殆ど居なくなっちゃったんだけどさ」

「そういえば若い頃、俺が傭兵をやっていた時に戦場で見かけた魔法使いは、魔法を発動する時にブツブツ独り言みたいなのを言っていたな。その時は、戦いの最中に独り言をつぶやくとは、暗いやつだなあって感じたただけだったが……」

「お父さん、それちょっと酷い」

ハイゼルの物言いにどつと笑いが起こる。

「さすがに、手をかざすとか、何かしらの動作をつけないと、上手にイメージを具現化できないんだけどね」

笑いが治まったあと、ディアナが苦笑気味に言った。

「なんで、今更そんな事を聞くんですか？」

不思議に思ったナックが尋ねた。

「これから自分の子供になる娘の事だから、詳しく知っておきたいなって思ったの」

微笑みを浮かべながら、そう言ったアイラの顔がほのかに赤く見えるのは、焚き火の明かりのせいだけではないだろう。

「アイラさん、今、何て……？」

予想外のセリフに、言葉の意味が理解できなかったディアナは、思わず聞き返した。

「あー、うん。だからね、私と隊長……、ハイゼルさんは、今年の秋に結婚する事になったの」

『ええー！ー！』

一同が声を合わせて絶叫する。

「くうっ、隊長！ ずりいつすよ！」

「アイラさん、本っ当こんな髭オヤジで良いんですか!？」

「ちくしょう……。オレ、副長が好きだったのに！ くうくう」

「殴るぞ？ お前等……」

隊員たちが口々に嘆き、アイラは苦笑している。ハイゼルは、口調こそ怒っているがまんざらでも無さそうに受け答える。

「良かったね。ディアナ」

ナックがディアナに微笑みかけた。

「う、うん。でも、なんか複雑……」

苦笑で返すディアナ。彼女にとってアイラは、歳の離れた姉のような存在だった。それが母になるのだ。今まで父親しかいなかった自分に、母という存在が出来るのは嬉しい。だが、それは同時に、アイラが姉ではなくなるという事なのだ。

「ゆっくり慣れていくと良いよ」

隊員たちがハイゼルを冷やかす喧騒の中、ナックがディアナに囁くように言った。

「うん、そっだよね……」

夕食の時間は、和やかなまま過ぎた。

その夜、見張りの順番などを決め、ディアナとアイラは、同じテントで眠る事になった。

魔獣

ディアナはベルトを外し、小剣と一緒にテント隅に立てかけ横になつた。

いつもと違う環境に興奮して、なかなか寝つけない。

アイラは流石と言うべきか、身体を休められる時には、しっかり休むという事が身に付いているのだろう。横になるなり、すぐに寝息が聞こえてきた。

テントの外からは、虫達の大合唱が聞こえてくる。屋内で聴くそれとは、規模も音量もまるでちがう。

二時間ほど、虫達の歌声を子守唄にしながら、襲ってくる気配がない眠気を相手に悪戦苦闘を試みたが、目はますます冴えるばかりであつた。

「夜風にあたつてこよう……」

小声で呟き、アイラを起こさないように注意を払いながらテントを抜けでる。

焚き火台の火は消され、宿营地から少し離れた湖寄りの所に明かり取り用の炎が見えた。そこが見張りの場所なのだろう。そこには、炎に照らし出されたナツクの姿があつた。

「お疲れさま」

ナツクに歩み寄つて囁くように声を掛けたディアナは、彼のそばへ歩み寄り、膝を抱えるように腰かけた。

「まだ起きていたんだね」

ディアナに微笑みかけながら、ナツクが言った。

「うん。なんか、寝付けなくて……。しばらく、ここに居て良い？」

「ああ。喜んで」

虫達は、相変わらず大合唱の中に、枯れ枝が弾けるパチパチという音と、ときおり聞こえてくる野鳥の声が入りまじる。湖面に映し

出された満天の星空は、風がほとんど無いという証拠だろう。

「二人きりでゆっくり話が出来るなんて、小さい頃以来かも知れないな」

ふと、ナツクが声を話しかけてくる。

「そうだね。わたしが小さい頃は、ナツクやアイラさんの後ろばかりついてまわっていたよね」

「そうそう。そして、必ずはぐれて大泣きしてね」

「あう、それは言わないでよお」

ナツクに笑いながら言われ、ディアナは真っ赤になって膝に突っ伏す。

「でも、その後に必ずナツクが迎えに来てくれたよね」

「そりゃあ、あれだけ大泣きしていたらね」

「それは、私じゃなくても来てた……？」

ディアナは、抱えた膝に頭を落とし、顔をナツクの方に向けやや上目遣いでナツクを見つめて問いかけた。

「あ、ゴメン。今の無し……!!」

あまりにも話の流れに無茶があった事に気づき、赤らんだ顔を隠すように顔を膝に押し当て、膝を抱える腕に力を込めた。尻尾だけが自分の意思と無関係にフリフリと揺れている。

「な、なんか、凄く静かだね……」

慌てて話を変えようとするディアナ。

いつの間にか、虫達の歌声も止んでいた。

そう、静かすぎる。

「ディアナ……」

ナツクが真剣な顔でそう呟くと、不意にディアナを押し倒すように覆いかぶさった！

「ちよつ、ナツク！ わたし、ナツクの事が好きだけど、物事には順序がつ！」

恥ずかしさが頂点に達した、思わず大声で告白する。その瞬間、先ほどまで自分の頭があった虚空を何かが掠めとおり、大きな音を

立てて地面をえぐった！

すぐに起き上がり剣を抜き放つナツク。

「立て！ ディアナ！ 俺の後ろに下がれ！」

そう叫びながらディアナの腕を引きあげ、無理やり立たせる。

何が起きたのか、瞬時に状況が理解できなかったディアナは、されるがまま立ち上がる。そして、目を凝らして闇の中を見つめると、ぼんやりと巨大なシルエットが浮かび上がってきた。

「ディアナ……、明かりを放てるか？」

ナツクは、よろよると立ち上がったディアナに尋ねる。

「……うん」

ディアナが空に掌をかざし、眩い光輪をイメージすると、空に現れた小さな光の玉があらわれ、それがみるみる大きくなり、人の頭ほどの大きさになる。

光の玉が映し出したのは、体長が五メートルほどもある、顔がのつぺらな首長竜のような生物。ヒレのような四本足で湖岸へ這いあがり、ぬらりとした体から水を滴らせながら、こちらに伸ばした頭をもたげている。

「こ……、これが魔獣……！？」

「そうみたいだな……、ブリーフィングで聞いていた特徴とも一致している……」

魔獣は、のつぺらな顔をディアナの方へゆっくりと向ける。

(まさか、ディアナを狙っているのか！？)

ナツクは、魔獣のその挙動を見てそう感じた。

魔獣の顔先が裂け、鯨のような牙が並んだ口をあらわにすると、その頭をディアナ目かけ、まるで槍のように繰りだした！

ディアナを庇うように立ちはだかり、魔獣の牙を剣で受け止めるナツク。

「くっ、図体がでかいだけあって、力も半端じゃない……っ！」

ズルズルと後ろへと押しやられる。

「ナツク……！」

彼の名を叫びながら横へ走ったディアナは、右の掌を振り上げ火球をイメージする。虚空に火の玉があらわれ、それが力ボチャほどの火球になったところで手を振り下ろし、魔獣目がけて飛んでいくのをイメージした。

火球は、魔獣の首元に命中し、炸裂音とともにはじけた。魔獣が一瞬怯んだ隙について、ナックが喉元に入り込んで斬り上げる。

斬り口から、青い体液をしぶかせ、雄叫びのような悲鳴を上げながら、魔獣は悶絶するように身体をよった。

「よしっ、効いている!」

二撃目を繰り出そうとした瞬間、

「ナック、危ない!」

ディアナの悲鳴のような叫び声と同時に、脇腹に鈍い衝撃がはしる。

そのまま吹っ飛ばされたナックは、木の幹に背中から叩きつけられた。

「うぐっ!」

激しい痛みと、肺を満たしていた空気が、全て吐き出されるような感覚に襲われたが、ナックは何とか意識を保つ事が出来た。魔獣の尻尾でなぎ払われたのだと理解する。

「ナックっ!」

名を叫びながら、ディアナは彼の元へ駆け寄った。

「おい、何事……って、これは聞いていた以上のデカさだな」

騒ぎに気が付き、テントから出てきたハイゼルが、あまりの巨大さに呆れたようなつぶやきを漏らす。他の隊員もそれぞれのテントから這い出てきた。

「ディアナ、お前はナックを治療しろ! ほかの者は魔獣の相手だ。取り囲んで仕掛けるぞ! ターゲットを絞らせるな!」

「お父さん、尻尾に気をつけて!」

ハイゼルに向かってそう叫び、ナックの元へ駆け寄る。

「大丈夫!？」

「ああ、何とか生きているよ……」

後頭部を摩りながら、よろよろと起き上がる。したたかに打ちつけられたが、骨は無事なようだ。

「待っててね。今、治癒するから」

そう言っ、ナックを包むように両手を広げて、全身の傷が消えていく様子をイメージする。

全身を淡い光で包まれたナックは、身体中の痛みが和らいでいくのを感じた。

「相変わらず、ディアナの魔法は凄いね」

手のひらを数回握ってみて、身体の痛みが殆ど消えたのを確かめる。

「致命傷だと、私の魔法じゃ治せないから気をつけてね」

「わかったよ」

そう言っ、剣を拾って立ち上がる。

ハイゼル達は、完全に魔獣を手玉に取っていた。一人が斬り付け魔獣の気をひき、すぐに後退。魔獣が攻撃に移る前に、別の隊員が攻撃を仕掛ける。魔獣は、牙や尻尾で反撃を試みるが、どれも空を切るだけだった。そんな事を繰り返すうちに、魔獣の身体は、みるみるうちに青い体液まみれになっていった。だが、いっこうに勢いが衰える気配を見せない。

突如、魔獣が横薙ぎに水を吐きだした。

ハイゼルとアイラは、咄嗟に躲すことに成功したが、隊員が一人まともに食らってしまい、水圧で吹き飛ばされて、テントをなぎ倒した。

吹っ飛ばされた隊員は、顔を歪ませながら、よろよろと立ち上がる。

「こいつ、水のプレスまで吐くのか!? 水……?」

ナックは、そう呟き一つのアイデアが浮かんだ。

「ディアナ。ちょっと協力してくれないか?」

そう言うと、思いついた作戦をディアナに説明する。

状況だけ見るなら、討伐隊が優勢だった。特にハイゼルとアイラの剣撃は、確実にダメージを蓄積させている。だが、止めを刺すための決定打を、いまひとつ欠いていた。

魔獣に蓄積させたダメージより、隊員たちの疲労の方が深刻になりつつある。

「ギリ貧ね。これじゃキリが無いわ」

アイラが顔に疲労を滲ませながら言った。

その瞬間、火球が飛来し、魔獣の頭に当たって炸裂する。

「こつちよ！」

ディアナが手を叩いて、魔獣の気を引いた。

魔獣は、何かを思い出したようにディアナへと向き直り、ハイゼルたちを無視してディアナに迫る。

ナツクが、ディアナと魔獣の間に立ちはだかる。

牙を剥き出しにしてディアナに迫る魔獣。

「ディアナ、今だ！」

ナツクの声を合図にして、ディアナは彼に向かって手を広げ、彼の剣身が放電している様子を強くイメージする。

ナツクの剣身が帯電し、スパーク音を立てはじめた。

魔獣がナツクには目もくれず、牙を剥きながらディアナに襲い掛かった。

「おおおおりやああ！」

魔獣の懐に潜り込んだナツクは、掛け声をあげて、ディアナへ向かって伸びたその首元に、剣を深く突き立てる。

剣が柄元まで刺さると、剣身が帯びていた電流は、はじけるような音を立てて魔獣の全身を駆け抜けた。

二、三度痙攣し、魔獣はそのまま倒れ付す。

魔獣の首から剣を抜きとったナツクは、その剣をそのまま魔獣の脳天に突き立てるた。

「殺ったか？」

ハイゼルが駆け寄る。

「はい。思った通り、こいつの身体は、電流を良く通しました」

「なるほど。ディアナの魔法で剣身を帯電させ、それを頸部に突き刺す事によって魔獣の中樞神経を直接破壊したのか！」

「はい。ディアナが居てくれたからこそ、実行できた作戦でした」
アイラを含む他の隊員達は、みな肩で息をしていた。

ハイゼルは、魔獣の頭を踏み揺らし、反応が無い事を確かめる。

「任務完了だ。早朝、村へ戻るぞ」

ハイゼルは、任務の終了を宣言した。歓声を上げる隊員たち。

「ナツク、お前も休め。俺が朝までの見張りをやる」

「では、お言葉に甘えて……」

ハイゼルの申し出に素直に応じるナツク。

テントに戻る途中、吹っ飛ばされた隊員の治療をしているディアナにそっと近づき、

「さっきの話だけど……俺もディアナが好きだ」

笑顔でそう言い残し、自分の寝床へと消えていった。

顔を真っ赤にするディアナ。

「隊長といい、ナツクといい、何なんだよ……って、うあっちゃちゃちゃー！！」

治療を受けていた隊員を包む淡い治癒の光が淡い炎へと変わっていく。

「あちい！ あちいつて！ 恋の炎を俺に具現化すんなー！！」
彼の悲鳴が夜の森へと消えていった。

翌朝、魔獣の屍骸を再度確認したあと、討伐隊は村へと戻っていた。

全身に軽い火傷を負った隊員以外は、目立った怪我人も無く魔獣討伐の任務が終了した。

襲来 1 (前書き)

1 - 3にあたる部分ですが、これも長いので分割してUPします。
次章から、戦闘描写が生々しくなるため、今のうちからR - 15指
定と残酷描写ありにチェックを入れさせてもらいました。

村へは、昼前に戻ってくる事ができた。

ハイゼルは、魔獣討伐の報告をするため村長宅へ出むき、ほかの隊員たちは詰め所へもどる。

ディアナは、まっすぐ自宅へ戻った。自室に入り窓を開け、それからベルトを外してベッドの上に置き、そのままベッドへ腰かけた。心なしか呆けている。

『俺もディアナが好きだ』

昨夜、ナックから言われた言葉が、ディアナの頭の中で鳴りひびく。

顔中から湯気が立ちそうなほど、瞬時に顔を紅潮させ、ベッドの上へうつ伏せに倒れこんで掛け布団を強く抱きしめて、それに顔を埋めて、足をバタつかせながら気を紛らせた。

窓から心地良いそよ風が流れ込み、ディアナの頬を優しくなでる。興奮してほとんど寝られなかったということもあって、急激な睡魔に襲われたディアナは、知らぬ間に眠ってしまった。

「あと三十分ほどで指定された座標へ到達します」

蒼空を翔る1隻の飛空船。シランディア帝国空軍所属のエンシェントシップ、軽巡洋艦『ガラティン』。後ろに向かって緩やかに膨らみを増す二等辺三角形の船体両翼先端のウイングレットが、雲を引いて飛んでいる。船体に内蔵されている艦橋で、航海士が指揮官に向かって告げた。

艦橋前方上部に設置された大型のモニターが、周囲の景色を映し出している。

「しかし、こんな山と森しかないような場所に、本当に人が住んでいるのでしょうか……？」

航海士が言うように、眼下に広がる景色は樹木ばかり。とても人

間が住んでいるようには見えなかった。

「わからん。だが、注意を怠るな!？」

形状こそ簡素だが、装飾きらびやかなハーファーマーを身につけた、四十代前半ほどの精悍な顔つきをした男が、鋭い眼光を航海士に送りながら言う。

航海士は、「は!」と短く答え、再び計器に向かって作業を始めた。

「しかし、本当に見渡すかぎりの樹海ですな」

男は、司令官席で目を閉じて鎮座している、漆黒の全身鎧を身に纏った男に向かって言った。

「卿を巻き込むような形になって、済まなかった。ジェイナス副将」
目を開け、正面を見据えたまま、漆黒の鎧の男が静かに言う。

「まあ、うちの大將の命令ですからね」

「それに、本来なら近衛將軍であるラーバス殿が、自ら出向かねばならぬような作戦内容でもないですからな」

真顔に戻ってそう言うのと、艦橋正面上部のモニターに目を向けた。
その時、航海士が声を上げた。

「あつ、村です! 指定座標に村があります!」

航海士が操作盤のキーをたたくと、モニターの映像が指定座標地点の拡大映像へと切り替わる。

「本当に人里があるとは……」

地図にすら載っていないその村の映像を眺め、ジェイナスが呟く。
「この世界には、帝国の影響を受けてない隠れ里のような村が、まだ無数に存在しているのかも知れんな」

「そうですな」

ラーバスが言い、ジェイナスがそれに答える。

そして、ジェイナスは通信士に向かい、艦内放送の準備を命じた。
通信士が手元のパネルの上に指を躍らせる。

「副将。準備が整いました」

通信士がジェイナスにスピーカーマイクを手渡す。

「ジランディア帝国空軍副将のジェイナス・ファストルフだ。当艦は、これより目標地点へ降下を開始する。目標地点に村があるが、我々は略奪者ではない。無抵抗の者に刃を向ける事を禁じる。諸君等の健闘を祈る。以上だ」

スピーカーマイクを受け取ったジェイナスは、一文ごとに呼吸をおいて、力強く言い直った。

「どれほどの効果があるか、分かりませんがね……」

艦内放送を終えると通信士にスピーカーマイクを渡し、そう言って苦笑する。

ラーバスは、目を閉じたまままでその言葉を聞いていた。

「当艦は、これより降下を開始します。降下ポイントは、村東端の麦畑」

オペレーターの女性兵士が席を立ち、ジェイナスに報告する。

「畑か。あまり村を荒らしたくはないのだが……。仕方ない、許可する」

ジェイナスが着陸の許可をくだすと、飛空船がゆっくりと降下を始めた。

自警団詰め所では、昨夜の魔獣討伐メンバーがくつろいでいた。

クルト村のような辺境の村では、そう滅多に事件が起こるわけもなく、普段なら剣の稽古など訓練のための時間が殆どだった。だが今日は、昨夜の事もありそれも休みらしい。

「暇ですねえ」

椅子に腰掛けたナツクが、窓の外を眺めながらぼんやりと呟く。

「俺たちが暇ということは、村が平和だということだ」

開いた本を顔に乗せ、胸の上で腕を組み、椅子に浅く腰掛けて、テーブルに足を投げ出しくつろいでいるハイゼルが、くぐもった声で答える。

「なあに、二人して腐ってるの？ 紅茶を淹れたから、みんなで飲

みましよう」

トレイにティーカップを載せて、詰め所の小さな厨房から出てきたアイラは、完全に気が抜けている二人を見て苦笑しながら言った。「隊長、カップを置きたいから、足をどけてくださいね」

そう言つて、ハイゼルの足を退かせ、軽くテーブルを拭いてからティーカップを並べていく。

「あれ？ もう尻に敷かれてるんスか？」

自警団員の一人が、ニヤケ顔でそう言つてティーカップを受け取りにやってくる。

その団員がテーブルの上のティーカップを取ろうとした時、不意に細かい振動が建物を包み込んだ。

ティーカップ達が、テーブルの上を小刻みに踊りまわり、そのうちいくつかは床に落ちて割れる。

「地震か!？」

「いや、この揺れは、もつと違うものだ……」

ナツクが、勢いよく立ち上がつて声を上げ、ハイゼルは、冷静に答える。

地鳴りのような音が、徐々に近づいてきて、村全体を包みこむ。

「隊長、大変です!!」

巡回中だった団員が、勢いよく駆け込んできた。

「どうした!？」

「飛空船です! 飛空船が村へ降下してきました!!」

その直後、不意に詰め所に差し込んでいた日の光が遮られた。

窓際へ駆け寄り、空を見上げるハイゼルとナツク。

上空を横切る鉄の巨軀。

全長百二十メートル。グライダーを連想させる二等辺三角形。両翼先端には、ウィングレットが取り付けられており、船体後方の両翼下部には、一對のスラストユニットとそれを繋ぐように配置された動力部。

船体下部には、翼を広げてこちらを見据えるように描かれた『リ

ンドブルム』の紋章。

「あの紋章は……」

「ジランディア帝国……!?!」

ナツクが声を絞り出すように呟き、それに答えるようにハイゼルが続ける。

飛空船は、空気を震わせながら村の上空を通過し、ライ麦畑へ覆いかぶさるようにゆっくりと降下していく。

スラストユニットの底部から降着装置が現れ、まだ青いライ麦をなぎ倒して、周囲に振動を伝えながら着床した。

飛空船の低く唸るような駆動音がゆっくりと消え、それと同時に動力部前方の開閉扉が開き、地面に向かってすするとローディンクランプが現れる。

そこから、バフ・コートの上からクウィラスを身に付けた兵士達が次々と降りてきて、飛空船の横に整列する。

そこへ、ハイゼルら自警団たちが駆けつける。

士官と思われるちよび髭の男が前へと歩みでて、モリオンを小脇に抱えて仁王立ちになる。

「この村に魔法を使える者が居るはずだ！ 大人しく差し出してもらおう」

士官らしき男が、踏ん反り返って叫ぶ。

「知らない」

ハイゼルが冷ややかに答える。

「嘘をついても、お前達のタメにならんぞ？」

「仮に居たとしても、お前たちの要求に応じられんな」

横柄な帝国士官に鋭い視線を返すハイゼル。

「交渉……決裂だな……」

くぐもった声で脅すように呟く帝国士官。

「交渉？ これがか？」

ハイゼルの言葉を合図にするように、帝国兵が腰にさげたサーベ

ルを一斉に抜刀する。

それに合わせて、自警団員たちも一斉に抜刀した。

クルト村を一望できる小高い丘の上に、側車付きのバイクが一台止まっていた。

側者つきバイクに跨った、二十代半ばくらいの黒髪の青年が、村の様子を窺っている。

「おいおい、アルよお、なんだか、偉え物騒な事になってるぜ？」

青年は双眼鏡を覗きながら、側車のボンネットに片足を投げ出し、首の後ろで腕を組んで、側車のシートに全体重を預けている、十代後半と思しき少年に言った。

アルと呼ばれた少年は、返事もせず目を瞑ったままだった。宿を借りられそうな人里を求め彷徨い、やっと見つけた村。

二人は、しばらくこの村を拠点に『仕事』をするつもりで、先ほどこらここで村の様子を窺っていた。そこへ、ジランディア帝国軍の飛空船が飛来したのだ。

「ったくよお、こんな辺境で、やっとみつけた人里だってえのに……」

少年からの返答が無いことを気にせず、ブツブツと文句を言う。

双眼鏡の向こうの景色では、今まさに帝国兵と自警団との間で、戦いの火蓋が切られたところだった。

「おお？ この自警団、なかなかやるじゃん。こんな辺鄙な村の自警団にしては、練度高えぜ？」

倍以上の数の帝国兵に対し、まったく遅れを取らないこの村の自警団の戦いぶりを見て、賞賛の声を上げる。

「お、すげえ！ あの髭のおっさん、立て続けに三人も斬りやがったぜ？ あれが自警団長か？ やたら腕が立つな」

「葉月、お前よりもか……？」

アルが、静かに声を上げた。

「良い勝負ってとこかな」

血がたぎるのか、双眼鏡を覗いたまま、腰に差した刀の柄頭を左手で無意識に撫でながら、素直な感想を答える葉月。

その景色の先では、伝令らしき兵士が、慌てて飛空船の中へと駆け込んでいく姿があった。

艦橋にある巨大なディスプレイには、艦下の映像が映し出されていた。

数で圧倒するはずの帝国軍は、予想外の強敵に苦戦を強いられている。とくに艦下では、自軍の兵たちが次々と打ち倒され、ライ麦畑の中に次々と骸を折り重ねていた。

「帝国の特殊部隊というのも、案外、不甲斐ないものですねあ」
映像を眺めていたジェイナスが唸る。

現在、艦下で戦っている敵兵は、若い男と隊長らしき中年の男。どちらも強いのだが、特に隊長らしき男がやたらと手練なのだ。

「辺境の小さな村と侮ってましたが、銃器の携帯も許可するべきでしたかね」

ジェイナスは、苦笑し豪快に頭を掻きながら言った。

戦線は、村の各所に広がり、一進一退の攻防が繰り広げられている。

ラーバスは、無言でじっと映像を見つめていた。

そこへ、伝令を携えた兵が息を切らして艦橋へ駆け込んできける。

「お伝えします！ 敵の中に腕の立つやつらが混ざっております！

このままでは、被害が増すばかりです！！」

切迫した表情で状況報告をする伝令兵。その声は、悲鳴さながらだった。

「ジェイナス副将。少し出てくる……」

ラーバスは静かに告げると、ジェイナスの返答も待たずにゆっくり艦橋の外へと消えていった。

窓から入り込む日差しと、頬をくすぐるそよ風。そこに混じる喧騒。

音に反応して、猫耳をピクンと動かしたディアナは、ゆっくりと眠りから覚醒する。

「いつの間にか、寝ちゃったんだ……」
体を起こし、目を擦りながら呟いた。

ふと、外が騒がしい事に気がつく。

「お祭り……なわけないよね？」

ベッドの上で立ち膝になり、窓を開けてあたりをキョロキョロと見回した。

隣のトミーおばさんが、必死の形相で走っているのが目に入る。

「おばさん、騒がしいようですけど、何かあったんですかあ？」
トミーおばさん呼び止め、質問を投げかけた。

「大変だよ、ディアナちゃん。ジランディア帝国軍がやってきて、村で暴れているんだよ！ 今、自警団のみんなが応戦しているよ！ 危ないから、家から出ちゃダメだよ」

その時、聞こえてくる喧騒が、怒号や悲鳴、鉄と鉄がぶつかり合う剣戟の音である事に、やっと気がついた。

ベッドにへたれ込むディアナ。ベルトに装着されたまま、ベッドの上に無造作に置かれた自分の剣が視界の片隅にうつる。

ディアナは、意を決するようにコクリと頷くと、ベルトを手に取り、それを腰に巻きつけた。

『ガラティーン』の艦下は、帝国兵が死屍累々を曝していた。

「ええい、相手は、たったの二人ではないか！ 取り囲んで一斉に仕掛けぬか！」

隊長らしき帝国兵が、サーベルを振り回しながら喚いている。

二十人近くいた部下たちは、七人を残すまでに減っていた。その七人が、背中合わせで立つハイゼルとナツクを取り囲む。

「次は、誰がその仲間に入るんだ？」

手近な帝国兵の死体を顎先で指し示し、自分たちを取り巻いている帝国兵を睨み返しながらハイゼルが言い放つ。

先ほど三人斬りという離れ業を見せ付けられたばかりで、足が竦んで誰一人として斬り掛かれないでいた。

「ナツク、村の状況が分かるか？」

「村全体に戦線が広がりがりつつあるみたいですね。自警団員も何人が無事なものやら……」

にじり寄りながらも、一向に飛びかかろうとしない部下たちにしびれを切らし、ヒステリックな号令を掛けようとした時、漆黒の全身鎧を身に纏った男が船内から現れ、ゆっくりとローディングランブを降りてきた。

「あれが敵の司令官か……？」

その姿を見て、ナツクが小さく呟いた。

「お？ 飛空船からゴツい鎧を着た、偉そうなヤツが出てきたぜ？」

そう言つと、葉月は「見るか？」と言つふうにアルに双眼鏡を渡した。

双眼鏡の下から現れた瞳は、端正では無いが気の良さそうな青年然としたものだった。だが、どこか抜け目の無い輝きがある。

仏頂面で双眼鏡を受け取ったアルは、上体を起こして側車のふちに座りなおし、双眼鏡を覗き込んだ。

「っ！ー！」

「な？ ありや、結構な地位の奴だぜ？」

葉月は、深緑色の上着の掛衿を正しながらそう言った。そして、「こんな辺境までご苦労なこつた」と呟きながらアルの方を向いた時、アルがわなわなと震えている事に気が付いた。

「おい、アル。 どうしたんだ？」

訝しげに訊ねる。

「……あの村に用が出来た」

そう言つて葉月に双眼鏡を返すと、側車の座席シートに掛けてあった内側に板金を縫い付けてある皮のジャケットを羽織つて、軽やかに側車から飛び降りた。

「用つて……。帝国軍が荒らしまわつたあとじゃ、拠点として使えねえから引き返そうぜつて話をこれから」

「すまん、葉月。俺は行く」

アルは、葉月の言葉を最後まで聞かずにそう言つと、バスタードソードを腰の剣吊りに差して村の方へと駆け出す。

「つて、おい！ アル！！」

葉月の呼びかけに対して振り返る素振りも無く、アルの姿は、そのまま村の方へと消えていった。

「つたく……。俺は、もう暫く様子見をしてるか」

呆れ顔で頭を掻きながら呟いた葉月は、再び双眼鏡で村の様子を眺めはじめた。

自宅を出ると、トミーおばさんが六人の帝国兵に囲まれている姿が目に入った。

隊長らしき男は、濃紺の髪を肩まで伸ばした二十歳くらいの青年で、部下たちとは違い、クウィラスもモリオンも身につけていない。腰の武器もサーベルではなく、シャムシールを下げている。

「もう一度聞くぞ？ 魔法使いの居所を教えろ！」
帝国兵が声を荒げる。

「だ、だから知らないつて言ってるじゃないかい！」
隊長、抵抗を確認しました」

トミーおばさんに絡んだ帝国兵の一人が、ニタリとした笑みを浮かべて濃紺の髪的青年に申告する。

「殺せ」

青年がそう言った直後、帝国兵が剣をトミーおばさんの腹部へと突き立てる。

「ぎゃあああああ!!」

「おばさん!!」

絶叫しながら絶命するトミーおばさんと、それを楽しそうに眺める帝国兵たちを目の当たりにして、思わず叫ぶディアナ。

その声を聞いて、帝国兵達が一齐にディアナを注目する。

「んんん? なかなか面白い趣向をお持ちのお嬢さんじゃないか? へへへ……」

トミーおばさんの血で染まった剣を持つ帝国兵が、ディアナを見て嫌らしい笑みを浮かべながら言った。

反射的に剣を抜くディアナ。

「抵抗確認 ラディ隊長お、殺る前に楽しませてもらっても良いっすか?」

目をギラギラさせながら青年に問う帝国兵。

「好きにしる……」

ラディと呼ばれた青年は、ニヤリと笑みを返す。

その表情は、端麗な容姿を醜悪に歪ませていた。

許可を得た帝国兵は、目を血走らせ、鼻息を荒げながら、じりじりとディアナに近づいていった。

「おじさんはねえ、じゃじゃ馬よりも従順な方が好きだなあ」

他の兵士は、にやにや笑いながらラディと共に後ろへ控えている。

「ほら、とつとと片付けるよ!!」

「あとが問えてんだからよお!!」

「油断して、ヤラれちまうんじゃないぞ?」

兵達が口々に揶揄した。

「やああああ!!」

ディアナは、大地を蹴って一気に詰め寄り、掛け声とともに逆袈裟に剣を振り上げる。

それをあっさり受け止めた帝国兵は、刃を合わせたまま、手際よ

く股間を覆う部分鎧を外してディアナににじり寄った。

そして、ディアナを押し倒そうとした瞬間、果物がつぶれるような鈍い音をたてて、ディアナの膝が帝国兵の股間にえぐり込む。

「……………っ!!」

声にならないうめき声を上げて、股間を押さえて前かがみになる帝国兵の頭部目がけ、ディアナは思いきり剣を振り下ろした。

非力なディアナが鉄の兜に覆われた頭部に剣を振り下ろしても、頭をかち割ることなど出来ないが、それでも鈍器で殴られたくらい衝撃が伝わったらしく、その兵士は、股間を押さえたままの体勢で前のめりに突っ伏し、口から泡を吹き、痙攣しながら気絶する。それを見た残りの帝国兵達が、間髪入れずにディアナを取り囲んだ。

決して、倒された仲間への復讐心からの行動ではない事は、取り囲む兵達の表情を見れば一目瞭然だ。

ニヤついた表情のまま、ディアナに剣を向けてじりじりと詰め寄ってくる。

一斉に仕掛けられたら、魔法を発動させる事も間に合わない。どこに活路を見出そうかと考えていたとき、数本の矢が飛来して、帝国兵の一人へとつき刺さる。

短い悲鳴を上げて倒れ付す帝国兵。

「ディアナちゃん、こっちよ!!」

声の方へ振り向くと、クロスボウを構えた自警団員が三名と、それを従えたアイラの姿があった。

迷わずアイラの方へと走り出すディアナ。包囲を抜ける瞬間、ディアナを捕まえようと帝国兵が動くが、その脇をすりりと抜けて一気に駆け抜ける。

「ここは、私達に任せて早く逃げなさい」

駆け込んできたディアナの肩を抱きしめたアイラは、彼女の瞳を見つめて言った。

「ふふ、大丈夫よ」

心配そうな表情でアイラを見上げるディアナに、アイラは頭を撫でながら優しく言葉をかける。

その姿を見たディアナは、コクリと頷くとその場を駆け離れていた。

目指すは、村の東。家々の屋根越しにそびえる、全高四十メートルはあろうかと思われる巨大な人工物。

父とナックが居るのは、恐らくそこに間違いないだろう。

ハイゼルとナツクは、お互いにやや距離を取り、漆黒の鎧の男ライバスと対峙していた。

ライバスは、飛空船から降りてくるなり、兵たちを下がらせ、手を出さないように告げると、腰の大剣をすらりと抜きはなつ。

ナツクとハイゼルが、同時に男へ斬りかかるが、その攻撃は、あっさりと防がれてしまった。

この男さえ倒せば、帝国軍も諦めて撤退するだろうと思っていたハイゼルだったが、男の実力を知ると、その考えをあらためて別の策を考えはじめた。

それは、自分が囷となって男の足止めをしている間に、ナツクがディアナを連れて村を脱出するというものだった。

どうやって調べたのか、帝国はディアナの力の存在を知っているのだろう。そして、その力を手に入れるために、このような強攻策を仕掛けてきたということは、帝国にとってそれが、どうしても必要なものだという証拠だろう。

ならば、なおさらディアナを渡すわけにはいかない。

少なくとも、今の帝国には……。

「ナツク、お前は」

隙を与えないようにライバスを睨みすえたまま、ハイゼルがナツクに語りかけようとした時だった。

「お父さん！ ナツク！」

ディアナの叫び声が耳朶を打つ。

「ディアナ、来ちゃダメだ！！」

その声に張り詰めていた緊張をかき乱されたナツクは、ディアナの方を振り返って叫んだ。

「ナツク、避けるっ！！」

「え……！！？」

瞬歩のごとき速さで、一瞬の隙をついたラーバスが、ナツクを袈裟に斬った。

金属がぶつかる音と肉が切れる鈍い音が入り混じる。

「デイ　ゴボツ！」

その後続く言葉は、血の塊となって喉の奥から吐き出された。

上体が肩口から前方へとずり落ち、下体が反対側へと倒れて臓物を撒き散らす。

「　っ！！！」

絶句するディアナ。

「ナツク……、くそっ！」

ラーバスは、大剣の血振りをすると、ゆっくりとハイゼルへ向きなおる。

再度、剣を構えなおし、ハイゼルは相手の隙をうかがった。

無構えで立つラーバスだが、その何処にも隙を見あたらぬ。

ハイゼルの額を一筋の汗がたう。

ふと周囲に冷気が漂いはじめたことに気がついた。

大気が冷気を帯び、ラーバスを睨みすえているディアナの元へと流れ集まり、周囲の空気がパキパキと音を立てはじめる。

「馬鹿なことは止せ！！！」

それを見たハイゼルは、声を張り上げて止めるが、既にディアナの目の前に氷の鏃がいくつも具現化されていた。

ディアナが素早く右手をラーバスにむかって振り下ろすと、氷の鏃がラーバスへと襲い掛かる。

ラーバスがそれを左腕で防ぐと、鏃に触れた部分が次々と凍りついていった。

一瞬だけ驚いたように目を見ひらき、氷の塊と化した自分の左腕を見る。

次の瞬間、既に火球を具現化させていたディアナは、それをラーバスむかって放った。

ラーバスは、それを凍りついた左腕で打ち払う。

火球が弾け、その熱波はラーバスの腕の氷を一気に蒸発させた。水蒸気が辺りを埋め尽くす。

ディアナが次にとる行動を察したハイゼルは、それを制止しようと彼女の元へ駆け寄り、それより早く、小剣を抜き放った。ディアナは、剣を突き立てるようにラーバスへと突進していった。

「あああああああああああ！」

怒気ともとれる気迫のこもった掛け声と共に、水蒸気が煙る中へと消える。

霞の中で鈍い音が響いた。

「ディアナ！」

霞の中へ向かって叫ぶハイゼル。

霞は、次第に晴れてゆく。そこに現れた光景は、ラーバスが大剣の柄頭を、ディアナの鳩尾へと食い込ませている姿だった。

ディアナの手から小剣が滑り落ち、その場に倒れ伏す。

「この娘だ。連れて行け」

ラーバスは、後ろに控える兵にそう告げた。

「うおおおおお！」

兵がディアナを連れ去るために動こうとしたとき、ハイゼルが雄叫びをあげながらラーバスに斬りかかる。

その攻撃は、あっさり大剣で受け流されるが、反撃の隙を与えない連続攻撃が続いた。

それを躲し、あるいは剣で受け流しながら、ラーバスは徐々に後退する。

ある程度ラーバスをディアナから引き離れたハイゼルは、いったん飛び退き、ディアナの前に立ちふさがるような形で剣を構えなおした。

「ディアナは、わたさん！」

ハイゼルは、そう叫ぶと鬼気迫る表情でラーバスを睨み据えた。

「……………」

無言のまま大剣の切っ先を後ろへ流したラーバスは、右足を引い

て身を沈ませ、下段に構える。そして、大地を蹴りつて、瞬歩の如き速さでハイゼルへ迫り、水平に剣を一閃する。

その攻撃を両手持ちにした長剣で受け止めたハイゼルは、合わせた刃を支点に持ち手を潜り込ませ、柄頭でラーバスの顔を狙った。頭を逸らしてその攻撃を避けたラーバスは、無防備になったハイゼルの左脇腹を狙って大剣を斬り上げる。

身がかがめてその攻撃をやり過ごしたハイゼルは、そのまま身体を回転させ、その遠心力を利用して、がら空きになったラーバスの右脇腹を水平に狙った。

だが、その攻撃を予想していたラーバスは、蹴込みを放ってハイゼルの攻撃にストッピングをかける。

「ぐっ！」

重い足鎧でブレストプレートを打ち据えられ、吹っ飛ぶハイゼル。転倒こそしなかったものの、体勢は大きく崩された。そこへ、追撃をしかけてきたラーバスが、一瞬で間合いを詰め、大振りの袈裟斬りを繰りだしてきた。

体勢が整わないハイゼルは、それを受け止めるべく上段受けで剣を構える。

金属がぶつかり合った甲高い音がこだました。

弧を描いて宙を舞う剣身。それが大地へと突き刺さる。

ラーバスの大剣は、ハイゼルの長剣を断ち斬り、ハイゼルの肉体を肩口から深く斬り裂いていた。

ラーバスが大剣を引き抜くと、ハイゼルの身体から大量の血が噴きだし、その場に崩れ台地に大量の血溜まりを作る。

勝負の結末を見届けた帝国兵たちは、ラーバスが大剣の血振りをするのを合図に、ディアナの回収を始める。

ラーバスが、飛空船内へと運ばれていくディアナを眺めながら大剣を鞘に納めようとした時、

「ラーバス！！」

そう叫びながら、まるで吹き抜ける一陣の風のように、それは帝

国兵の間を縫ってラーバスへと襲い掛かった。

しかし、その攻撃はあっさりとラーバスに防がれ、逆に剣圧にはじき返される。

その勢いを利用して後方回転し、その際にラーバスの顔を狙って蹴り上げを放った。

サツと顔を引いてやり過ごしたラーバスは、自分を襲った相手を見据えた。

レザージャケットを着た黒髪の少年が、向こう見ずな瞳の奥に憎悪の炎を灯して自分を睨みつけ、バスタードソードの切っ先を向けて構えている。

ラーバスは、ほんの一瞬だけ目元が緩むのを自覚した。

恐らく誰も、対峙する少年にすら気付かれない程度のものだろう。

「手を出すな……」

ラーバスが襲われたのを見て一斉に剣を抜く兵たちに対し、静かにそう告げ自らも大剣を構える。

しばし剣を構えながら対峙する。

先に動いたのは少年だった。大地を蹴って一気に距離を詰めた。

ラーバスの大腿部を狙って水平斬りをはなつ。

ラーバスはその攻撃をバックステップで躲すが、水平斬りはフェイントだったらしく、少年が剣を振りきる直前に、剣の軌道が突如として突き上げのそれに変わり、バスタードソードの切っ先がラーバスの顔面へと迫る。

かるく顔を逸らして突き上げを躲すと、大剣を大きく斬り上げた。それを前方に飛び込んで避けた少年は、そのまま側転してラーバスに向きなおる。

少年の頬に赤い線が刻まれ、そこから血がにじみ出た。

「そんなものか……？」

少年に向かって、ラーバスは静かに言った。

少年に向きなおり、大剣を構えなおす。

「剣とは、こう使うのだ……っ！」

言い終わつた瞬間、瞬歩の如き速さで少年との距離を一気に詰めたラーバスは、左袈裟に大剣を振り下ろした。

少年がそれを躲すと、そのまま大剣を切り返し、逆袈裟に振り上げる。

後ろに飛び退き、斬撃を回避する少年。

ラーバスは振り上げの威力を利用して一回転すると、まだ滞空中の少年に向かつて遠心力を上乗せした水平斬りを繰り出した。

それを剣で受け止めるた少年だったが、あまりの衝撃にそのまま水車小屋まで吹っ飛び、小屋の横に積んであつた木箱に激突して粉砕する。

木片に埋もれる少年。

ラーバスは、ゆっくりと大剣を鞘に納めて少年を一瞥した。そして、少年が起き上がってこない事を確認すると、飛空船の中へと消えていった。

飛空船から撤収を意味する閃光弾が打ち上げられた。

「ちっ、これから良い所だというのに……」

心底残念そうにラデイがつぶやく。

「ククク、命拾ひしたな」

陰険な笑みを浮かべてそう言いながら、シヤムシールを鞘に納めると、部下達に向かつて「戻るぞ！」と告げて踵を返してその場を立ち去つた。

拘束

ガラティン艦橋では、オペレーターが操作パネル上で指をおどらせていた。

「兵の収容、完了しました！」

オペレーターがジェイナスに報告する。

「発進作業を急げ。速やかに撤収するぞ。発進準備完了まで、どれくらいかかる？」

両手を腰に当て、ジェイナスが問い返す。

「およそ十五分です！」

「よし、発進準備が整い次第離陸しろ」

ジェイナスは、左手を腰に当たたまま、右腕を勢いよく振りかざして号令をかけた。

アルが木片の山から這い出る。

「くそっ、フザケやがって!!」

あきらかに手加減されていた事と、それなのに手も足も出なかった事への苛立ちを拳に込め、水車小屋の壁に叩きつけた。

バスタードソードを乱暴に鞘におさめる。

アルが立ち去ろうとしたとき、男に肩を借りて、足を引きずりながら向かってくる女剣士の姿が目にはいった。

右膝と右肘から血が溢れていて、着衣も乱れ、左肩があらわになっている。膝と肘の傷は、かなり深そうだ。恐らく臍も損傷しており、剣士として生きる事は、もはや不可能だろう。

その女剣士が、真っ直ぐアルのもとへとやってくる。

「あなたが何者で、何が目的でこの村に来たのかは、あえて聞かないわ」

苦痛に顔を歪めながら、アルに語りかけた。

「あなたに頼みがあるの。お願い、あの娘を……、ディアナを助け

て……っ！」

「何で俺がっ！」

女の突拍子もない言葉に、アルは思わず声を荒げる。

「あの娘には、特別な力があるの。帝国は、それを狙ってディアナを攫ったに違いないわ」

「特別な力……？」

「あの娘は、魔法を使えるの。しかも、呪文を詠唱する必要もなく、ただ念じるだけで発動できる」

アルは、無言で女の瞳をじっと見つめた。

「あんたの娘か？」

「いえ……」

女が左右に首をふる。

「この村を守る、自警団長の娘として育ってきたけど、この村に彼女の本当の親は居ないわ。でも、その事をあの娘は知らない……」

肩口が大きく裂けた、髭面の自警団員の亡骸を見つめながら女が語る。この男が自警団長なのだろう。そして、最後に小さく「私があの娘の母親になってあげられるはずだった」と目を伏せてつぶやいた。

「そんな事を見ず知らずの俺なんか頼んで良いのか……？」

「あなたは、帝国と剣を交えていた。敵の敵は、味方。今は、それだけで十分」

「そのディアナって娘を助ける事が、帝国を……、あの男の妨害をする事になるのか……？」

しばし考えて、アルが女にそう尋ねた。

「確証は無いけど、可能性としては、十分考えられるわ」

それを聞いたアルは、飛空船を見上げながら再び考える。

「ちっ、言っておくが、あんたの為にやるわけじゃないからな！」

「ありがとう……。私の名は、アイラよ」

「アルだ」

お互いに名を告げ合うと、アルは飛空船に向かって駆けだした。

「発進準備完了しました」

「よし！ ただちに発進しろ！」

ジェイナスがそう言うと、駆動音と共に艦全体がフワリとした浮遊感に包まれる。

ジェイナスの隣に立つラーバスは、まだガラティンの艦下が映し出されている映像を眺めていた。

ガラティンがゆっくりと上昇を始め、スクリーンに映し出されている景色が徐々に遠のいていく。

映像が艦下から艦前方のものへと切り替わる瞬間、自分に刃を向けてきた少年が、船に向かって走ってくるのが見えた。

それを見たラーバスがフツと小さく笑う。

「どうかされましたか？」

「いや、何でもない……」

怪訝な表情でジェイナスに問われ、小さくそう答えると、またいつもの表情に戻る。

飛空船は、ゆっくりと確実に高度を上げている。

全身をバネにして、離床直後の飛空船に飛びついたアルは、艦底の突起を掴むことに成功した。

既に数十メートル上昇しただろう。落ちたらひとたまりもない。

さいわい、艦のスラストユニットの表面は、凹凸が豊富で足がかりに困らなかった。

突起を利用して艦の外壁をよじ登りながら、進入口が無いかと探し回っていると、密閉された非常口らしき円形のスライド式の扉がみつかる。

そこへ這い伝いながら近づき、開閉パネルが無いか探してみた。

「さすがに、外からは無理か……」

ぼやきながら、腰の後ろに忍ばせてあるダガーを抜き、非常口中央の気密部分に刃を突き立てる。

その瞬間、刃が一瞬だけ淡く光ったかと思うと、瞬間的に空気が抜けるような音を立てながら、円形の扉が中央から左右にスライドした。

まさか、これで開くと思っていたいなかったアルは、目をしばたかせながら、ダガーと扉を交互に見つめる。だが、すぐに気を取り戻し飛空船内へと進入する。

「あんのバカ、無茶しやがって……」

丘の上から眺めていた葉月がぼやく。

飛空船が飛び立ったあとも、村は慌しかった。

生き残った自警団員らしき男たちが、犠牲者の遺体を一箇所に集めている。その自警団員の生存者も数えるほどしかない。

「……………」

しばし、飛空船が飛び立った西の空を眺めた。

「仕方ねえ、追うか……」

頭を掻きながらため息を一つ吐き、ハンドルにぶら下げているゴグルを手取る。

それを頭にはめると、バイクのエンジンキーを回し、キックレバーを力いっぱい踏み込んだ。

セルが回り、エンジンが点火する小気味良い音が腹にひびく。

飛空船が飛び立った方角には、樹海が広がっており、飛空船を追うには、樹海を大きく迂回しなければならなかった。

（帝都に向かって走れば、そのうち手がかりが拾えんだろ）

葉月は、心の中でそう呟くと、樹海を迂回するべく進路を北にとった。

ガラティン居住区の一室。

ディアナは、両手を天上から垂らされた鎖に繋がれ、足には足枷もはめられていた。

気を失っているため、手枷で固定された手首に全体重が押し掛か

っている。

ディアナが監禁された部屋には、彼女の他に数名の男達いた。そのうちの一人、濃紺の髪を肩まで伸ばした端整な顔立ちの青年が、手に持ったバケツの水を思いきりディアナにぶちまける。

一瞬、息が詰まり、ディアナは咳き込みながら目を覚ました。あたりを見回すと、男たちに取り囲まれており、嫌らしい含み笑いを浮かべながら自分を見つめている。

「これから、身体検査をおこなう」
濃紺の髪青年がニヤリと笑みを浮かべながらそう宣言すると、他の男たちが喜びに満ちた奇声を上げた。

その青年が、部下にトミーおばさんを殺すよう命じた、ラディという小隊長である事に気付く。

「……………」
ニタついて歩み寄ってくるラディを、ただ睨みつける事だけが、ディアナが出来る唯一の抵抗だった。

ディアナの目の前まで歩み寄ったラディは、顔を近づけて、まるで全身を舐めまわすように観察する。

ラディの息遣いが間近に感じられ、この男に対して激しい嫌悪感をいだいた。

ラディの顔が目の前に迫った時、プツと頬に唾を吐きかける。頬に張り付いた唾を親指で拭いたラディは、ニタリと笑みを浮かべながら、その指先を自らの口へと運んだ。

感情をあらわにして怒るでもないその行為は、かえってディアナに強い恐怖を与えた。

おもむろにディアナの耳や尻尾を握ったラディは、縦へ横へと引っ張りまわし、彼が力を入れるたびに、ディアナは小さな悲鳴を上げる。

「ふむ、作り物じゃなさそうだな……………」

耳の付け根を覗き込みながら、ラディが呟く。

「た、隊長！ 俺、もう我慢できねえっす！」

兵士の一人が声を上げる。

他の兵士たちも皆、目をギラギラさせている。

「ふっ、そう慌てるな……」

ニヤリと笑みを漏らしてそう言うと、ラディはディアナの胸倉を掴み、力いっぱい引き下ろして、チュニツクの胸元を引き裂いた。

「きゃあああああ！」

下着があらわになり、悲鳴を上げるディアナ。

兵達たちから歓喜の声が沸き上がる。

ラディは、邪笑を浮かべながら下着にも手をかけた。

それを引き裂こうとした瞬間、轟音とともに艦全体を衝撃がつつむ。

不意に襲ってきた激しい揺れに、ラディたちは思わず転倒した。

「何事だ！？」

揺れが収まり、起き上がりながらラディが叫ぶ。

その直後、艦内にアラーム音が鳴りひびき、第一級戦闘態勢を告げる赤色灯が点灯した。

「ちっ、お楽しみはお預けだ！ 様子を見てくる。俺が戻るまで勝

手なマネをするな！」

そう言い残すと、ラディは部下たちを残して足早に退室していく。

「勝手なマネだったって、なあ……」

兵たちがヒソヒソと言い合う。

俯いき、髪の前から水を滴らせながら、ディアナは声を殺して泣くしかなかった。

ガラティン艦橋は、慌しかった。

「所属不明艦から攻撃！ 艦後部に被弾しました！」

「空で帝国に刃を向けるのは、空賊どもしかないだろう。被害状況を知らせる！」

「損害軽微！ 戦闘行動に支障ありません！」

「よし、敵戦力の分析を急げ！」

レーダー管制官が手元のコンソールパネルをたたく。

「敵の戦力分析完了。当艦の右舷と左舷に巡洋艦クラスのバルーンシップ一隻ずつ、正面に軽空母クラスのエンシエントシップ一隻と小型機三十機」

メインスクリーンが三分割され、それぞれに敵の飛空船が映し出される。

そこには、装甲が施された細長い気囊の下に、帆船の船体部分のような胴体を配したバルーンシップが二隻と、分厚いヒラメのような船体を前後に穿ち貫いたような飛行甲板を持つエンシエントシップが映し出されていた。

「分が悪いな……」

スクリーンを眺めながら嘆息を漏らすジェイナス。

地上の大部分を掌握したジランディア帝国が、唯一掌握しきれないのが『空』だった。

その昔、若き空賊『バルト』が、天空に漂う旧世界の巨大な建造物を偶然発見する。

そこには、重力を制御し空中を航行する事が可能な船が、無傷のまま多数残されていた。

小型の兵器は、遺跡から発掘されるデータを基にして、レプリカを生産することは可能だが、飛空船のような大型兵器は、遺跡から発掘されたものを修復して使用する以外、入手する方法が無い。

バルトは、そこに仲間を集め自らの根城にすると、彼を慕い頼んで、数多くの人間が彼の元へと集まっていった。

それが『空賊都市』と呼ばれるまでの勢力に拡大し、バルトは自らを『空賊王』と称するようになり、現在にいたる。

それが空賊に関する、一般的な知識だった。

帝国が手にする前からエンシエントシップを手にし、科学力に措いても帝国に匹敵するものを有している。

そのせいで、帝国は空の半分しか掌握出来ずにいた。

「敵艦からの交信です」

そう言いながら、オペレーターは正面スクリーンを通信映像に切り替える。

そこに現れたのは、見るからにガラの悪そうな禿頭の髭男。

男は、肉食獣のような目をギロリと向けながらこう言った。

「積み荷を渡してもらおう。大人しく引き渡すのなら、お前らを見逃してやつてもいい」

「積み荷？ 何の事やらサツパリだな」

白々しく恍惚するジェイナス。

「そうか、なら力づくで頂くとしよう」

男は、そう言って強制的に回線を切断した。

正面の軽空母から、光が明滅されると、それを合図に小型機群が左右に展開した。

兵たちが館内を慌しく走り回っていた。

アルは、物陰に隠れてそれをやり過ごす。

既に脱出用ポッドの搭乗口を発見したアルは、あとはディアナを見つけて連れて逃げ出すのみだった。

そこへ、先ほどの衝撃。続けて兵達の動きが慌しくなり、狭い艦内の搜索を難しいものにしていった。

再び、通路を隠れ進むアル。

通路の突き当たりには人の気配のする部屋を発見した。

そつと中をのぞくと、四人の兵士が鎖に繋がれた少女を取り囲んでいる。

音を立てずにバスタードソードを引き抜く。そして、呼吸を整えると一気に室内へと躍り込んだ。

背後からの不意打ちで一人のわき腹をなぎ払い、返す刃で隣の兵士を左袈裟に斬りふせた。

「貴様！ 何処か」

驚き、剣を抜こうとする兵士の手首を切り落とし、背後から斬り付けようとしてきた兵士へ振り向きざまに剣を突きたてる。

そのまま剣を捻り廻し、それを引き抜くと、その勢いのままで、手首を切り落とした兵士の脳天に剣を振り下ろした。

四人の兵士を秒殺したアルは、刀身の血を払って鞘に戻すと、ディアナの方へ向きなおる。

「お前がディアナか？」

「あなたは、誰……？」

それを肯定と捉えたアルは、ポケットから針金を取り出しディアナの手足の枷を外した。

「俺はアルだ。お前を助け出してやる」

そう言いながら、ディアナにレザージャケットをかけてやる。

「気が散るから着てる」

アルにそう言われ、自分がどんな姿をしているのかを自覚して慌ててジャケットを羽織り合わせて胸元を隠す。

「何故、私を……？ 村のみんなは……？」

「詳しい話はあとだ。黙って俺に付いて来い」

ディアナがジャケットを羽織るのを確認すると、彼女の腕に掴んで部屋から連れだした。

脱出

空賊たちの小型機は、まるで得物を追い詰めるハイエナのように、ガラティンの周りを飛び交っていた。

空賊たちの小型機は、ぼつてりとした機体の後方に扇風機の枠を取り付けたようなプロペラを持つプッシュ式のレシプロ機で、長い主翼を持つ横長の機体だった。機体下部から前方にむかって長い砲身が伸び、垂直尾翼は両主翼の途中に取り付けられている。

小型機は、ガラティンの周囲を縦横無尽に飛びかい、機体下部の八十三ミリ無反動砲で、ガラティン側面に横一列に羅列された対空砲群を確実に潰していった。

「しかし、解せませんなあ。この布陣、まるで我々がここを通過することを知っていたかのようだ」

ジェイナスが腕組をし、モニターを眺めながら言った。

その間も、艦全体を振動が断続的に襲う。

「右舷第八対空砲沈黙！ 左舷第五対空砲もやられました！」

オペレーターの悲痛な叫びがつついた。

「やつら、こちらを丸裸にしてから、ボーディングをしかけてくるつもりだな？」

モニターには、対空砲に打ち抜かれた小型機が煙を上げながらヨロヨロと飛び続けたあと、爆散する姿が映し出される。

「ジェイナス副将。ここは、任せても良いか？」

それまで無言でモニターを眺めていたラーバスが、おもむろに口を開く。

「ええ、それは構いませんが、將軍はどちらへ？」

「野暮用を思い出してな」

「野暮用……ですか」

ジェイナスは、ラーバスを見つめる。

ジェイナスの視線に眉一つ動かさないラーバス。

しばしの無言のあと、

「詮索するのは、それこそ野暮というものなのではないかな」

ジェイナスは、肩をすくめてそう言うと、「ここは、任せてください」と続け、再び戦闘指揮に戻った。

「すまん」

ラーバスは、そう言い残して艦橋を去る。

「よし、艦首主砲展開。エネルギーチャージを開始しろ！ 一気に抜けるぞ！」

ラーバスを見送ったあとジェイナスは、砲雷長に命じた。

モニターは、また一機、小型機が爆散する姿を映し出す。

断続的に衝撃が襲う艦内を、帝国兵に見つからないよう、物陰に隠れながら移動した。

艦内を歩き交う兵士をやり過ごし、それが無理な場合は、アルが背後から近づき、口を押さえ、肩口から心臓をめがけてダガーを突き刺す。殺害した兵士の死体は、物陰などに放り込む。

途中、ラデイと遭遇した。

気付かれないように物影に潜むアルとディアナ。

ラデイは歩みを止め、フツと小さな笑みを浮かべると、

「何者か知らんが、隠れてないで出てきたらどうだ？」

そう言っつて、二人が隠れてる物陰へと向きなおる。

ゆっくりと物陰から姿を現し、腰のバスタードソードを抜こうとするアルを、ディアナが制した。

「私にやらせて下さい」

そう言っつと、アルの前で進み出て、ラデイを睨みつける。

「誰かと思えば、ククク……。そんなにさっきの続きがしたいのか？」

そう言いながらラデイは、ニタリという笑みをディアナに投げかけた。

「私を軽く見ないほうがいい……」

「ふん、小娘が！ まじないごときで何が出来る」
スラリとシャムシールを抜きはなつラディ。

ラディの言葉を見無視して右掌を正面にかざすと、ディアナはそこに熱が収束するのをイメージした。

すると、そこに熱を帯びた光の粒が集まり、それは白光する熱の球を形作りながら徐々に大きさを増していく。

「詠唱もなしに魔法が発動するだ！？」

驚愕するラディに向かい、握りこぶし大まで膨らんだ白熱球を飛ばす。

飛翔速度が特別早いというわけでもない白熱球が、ただ真っ直ぐに飛んでくるだけの光景を見て、ラディはニヤリと笑った。

「ふん、こんなもの当らなければどうという事はない！」

そう笑い飛ばしたラディが、白熱球の横をスルリと抜けようとした瞬間、

「爆ぜろ！」

掌を強く握り締め、ディアナが叫んだ。

その瞬間、白熱球は、爆炎と化してラディに襲い掛かる。

「ぐあああああああ！」

その熱波をまともに浴びたラディは、絶叫しながらのたうちまわる。

その光景にアルも唾然となってしまう。

「アルさん、行きましょう！」

「あ、ああ……」

ディアナに声を掛けられ我に返ったアルは、再び脱出ポットが収容されているブロックへと歩き進んでいった。

「こ……殺してやる……。ずたずたに引き裂いてやる……っ！」

二人が去ったあと、うつ伏せに倒れていたラディは、上半身を起こしながら憎しみを込めてつぶやく。

その顔は、左半分が焼けただれていた。

ラデイを撃退したあと、脱出ポットが収容されているブロックまでは、何の障害もなく辿り着くことができた。

部屋の中へ勢いよく飛び込むが、まるで二人を待ち伏せしていたかのように一人の男がそこに立っていた。

「何処へ行く気だ」

その男が静かに言った。

「くっ……！」

声の主を確認したアルは、小さく呻いた。

「その娘を渡せ」

さあと言つように手を差し出す。

「ラーバス……」

アルは、まるで吐き出すかのように男の名を呟き、

「おい、魔法である男の横にある箱を撃てるか？」

顎で壁に張り付いている三十センチ四方程の銀色の箱を指し、デアアナに耳打ちをした。

「やってみます」

小さく頷くと右手を掲げ、そこに小さな火球を具現化する。

それを見たラーバスは、剣の柄に手を添え抜刀の準備をする。

デアアナは、掲げた手を勢いよく振り下ろし、具現化した火球をラーバスの横の壁に向かって放った。

火球が命中し爆ぜる銀色の箱。それは、ライトの制御基盤だったらしく炎が箱から延びる配線を一気に伝い、並列されたライトが連鎖的に次々と爆ぜていく。

「っ！？」

予想していなかった攻撃に、ラーバスの動きが鈍る。

部屋中のライトが爆ぜてしまい、辺りが闇に包まれた。

「こっちだ！」

その隙に、アルはデアアナの腕を掴んで脱出ポットの一つに飛びこんだ。

すかさずハッチを閉めるアル。座席に付いて手元のパネルを適当

に操作しだす。

「くそっ、どうやってたら射出されるんだ！」

座席横の壁を、力いっぱい叩く。

通路では、赤い非常用ライトが点灯し、ラーバスの視界が確保された。

二人は、既に脱出ポットに乗り込んだようだ。

ラーバスは、二人が乗り込んだ脱出ポットを一瞥する。

その姿は、アルからも窺っていた。

脱出ポットが埋め込まれたの壁の操作パネルに近づいたラーバスは、それを操作すると、不意にポット内に彼の声が響く。

「せいぜい、抗ってみろ」

「何!？」

ラーバスが再びパネルを操作すると、脱出ポットのロックがガチャリと外れる。

そこまでの操作を終えると、ラーバスはゆっくりとした足取りで部屋を後にした。

「どういうつもりだ……。だが、これで射出できるぞ！」

「これで脱出できるんですか!？」

「ああ、死んでも恨むなよ？」

「……え？」

アルが勢いよくレバーを引く。ガコンという振動のあと、不意に浮遊感に包まれたかと思うと、次の瞬間、一気に落下する感覚が襲ってきた。

「きや つー!!」

三機の小型機が編隊を組んでガラティン上空から急降下する。無反動砲が同時に火を噴き、ガラティンの対空砲が撃ち貫かれた。

「主砲、エネルギーチャージ一五〇%になりました！」

「まだ撃つな。主砲だけは、なんとかしても守りぬけ！」

砲雷長の報告に檄を飛ばすジエイナス。

ガラティン艦首船底からは、唯一の主砲である長身の砲門が姿を現している。その砲身を狙って小型機が一機飛来するが、ガラティンの対空砲に翼を打ち抜かれ、きりもみ状に墜落し別の小型機と接触して二機とも爆散する。

ガラティンの対空砲群は、すでに半数が破壊され黒煙を巻き上げていた。

「主砲、エネルギーチャージ二〇〇%になりました！ 副将、これ以上は、砲身が持ちません！！」

「よし、目標は正面の敵空母だ。撃て！！」

ジェイナスがそう命じると同時に、ガラティンの主砲から閃光が放たれ、射線上にいた小型機を蒸発させながら空賊の空母へと迫る。その閃光は、分厚いヒラメのような空母を、正面から容易く貫いた。

空母はグラリと傾き、船体内で幾度も爆発を繰り返しながら船体が二つに折れて墜落し、やがて爆散し、いくつもの火の雨と化した。ガラティンの砲身も焼けただれて白煙を上げている。二射目の発射には、到底耐えられないだろう。

「今だ、機関最大、全速前進！ この空域から離脱するぞ！！」

「機関最大、全速前進。乗組員は、衝撃に備えてください」

ジェイナスの号令を復唱し、艦内に告げる通信士。

「副将、脱出ポットが一機射出されました！」

「構わん！ 行けっ！！」

主砲を失ったガラティンは、このチャンス逃すと飛空船ごと拿捕されてしまう恐れがある。

迷いの無いジェイナスの号令のあと、船内は船尾に向かって押し込まれるような感覚に包み込まれた。

ガラティンの全速離脱に、バルーンタイプの飛空船はもちろん、小型機すら追いつることが出来ない。

爆散した軽空母が残した黒煙を突き抜け、ガラティンは西の彼方へと飛び去っていった。

円錐形の脱出ポットは、降下速度を増しながら、荒野に向かってどんどん高度を落していった。

いくら脱出に成功しても、この速度で地表に叩きつけられたらひとたまりもない。

アルは、脱出ポットの中で様々な装置やレバーを闇雲に操作していた。

その間も荒野がどんどん迫る。

「ア、アルさん……っ!!」

体が脱出ポットの天上に吸い付けられ内臓が口から出てきそうな感覚に襲われながら、苦悶の表情を浮かべてディアナが声を絞りだした。

「喋るな、歯あ食いしばってる!」

叫びながらダガーを引き抜く。

「くそー!」

柄で基盤を殴りつけようと、ダガーを高らかに振り上げた瞬間、飛空船に進入した時と同じように剣身が白く淡い光を放ったように見えた。

「!?!」

だが、それを確かめる前に脱出ポットの床に叩きつけられるような衝撃に襲われ、意識は闇の中へと消えていった。

ポットの先端からパラシュートが現れ、それが膨らみ、脱出ポットに急激な減速をかけられる。

そして、まるで水面に落ちた水滴のように、虚空に波紋を浮かべて消えた。

落下する脱出ポットを追っていた空賊の小型機が、それを見て急上昇し、何が起こったのか分からぬまま上空を旋回し続けていた。

脱出ポットは、森林の中に落ち、木の枝に引っかかって止まって

いた。

足音が一つ、脱出ポットに近づく。足音の主が立ち止まり、木の枝に引つかかる脱出ポットを見上げた。

「まったく、無茶をする……」

そう呟きながらも、その顔には、瞳を細めた穏やかな笑みが湛えられていた。

出立

夢を見ていた。

とても長い、とても怖い夢。

でも、目が覚めたら、きっと何も変わらない日が続くに違いない。
……。

起きなきゃ……。

朝ごはんを作って、それからお掃除。その後にお父さんのお弁当を作ってから詰め所に持っていく。今日のお弁当は、何にしようかな……？

目覚める間際、そんな事を考えていた。

「ん……」

意識が徐々に覚醒していき、薄らぼんやりと瞳をひらく。

自らを包みこんでいたぬくもりを胸元に押さえ、まだ意識の半分が夢の中にある頭を必死にもたげ、なんとか上半身を起こす。

「……」

体のあちこちが悲鳴を上げている。それが意識を呼び起こす手助けになり、自分が見知らぬ部屋のベッドの上で寝ていたという事実を気付かせた。

「……」

あたりを見回すと、隣のベッドに自分より少し年上くらいの少年が眠っている。

「アル……さん？」

自分の中にある、まだ新しい記憶をたぐり寄せて、少年の名前を呟いた。

混濁した記憶を整理しきれないでいると、部屋のドアが不意に開く。

「やあ、お目覚めですか？」

顔を現したのは、エプロン姿でニッコリとした表情を浮かべた、

長い栗色の髪の青年だった。

「服、濡れてたし破けちゃってたんで、勝手に着替えさせていただきましたよ？ あ、これ、新しい着替えです。ここに置いておきますね？」

ディアナは、そう青年に言われて、初めて自分の服装に意識が向いた。

白いスリップの上にブラウスタイプのパジャマ、そのどれもが自分のものではない。

「ああ、変な事はしてないから、安心して下さいね」

そういう問題ではないのだが、今のディアナは、そこまで頭がまわる状態ではなかった。

そのとき、寝ていたと思っていたアルが突然起き上がり、青年の胸元に掴みかかる。

「ここは何処だ！？ お前は誰だ！？ 何故、俺たちがここにいる！？？」

矢継ぎ早に質問を浴びせる。

「ここは龍の森。私は、この小屋に住む者。私がお二人を運んだからです」

表情を変えずに、一つ一つをゆっくりと答える。

「森……だと？」

脱出ポットが落下する先にあつたのは荒野。その周辺に森など無かったはず。

「そんな事より、あまり急に動かないほうがいいですよ？ 二日も寝たままだったんですから」

そう言う青年は、アルの肩にやさしく手を触れ、そっとベッドに押しもどす。

何の力も入れられてないはずなのに、アルは無抵抗のままベッドに戻され驚きの表情をうかべる。

二日間で、そこまで体が鈍ってしまうものだろうか。

「もうすぐ食事の用意が整いますので、もうしばらく待っていて下

さいね」

何事も無かったようにそう言い残すと、青年は部屋のドアを静かに閉めて立ちさった。

部屋の中をしばしの沈黙がつつむ。

それを先に破ったのは、ディアナだった。

「あの……、助けてくれて、ありがとうございます」

「別に、お前のためにやったわけじゃないし」

あまりにそっけない返答に、言葉を失いかける。

だが、ナツクが斬られて以降の事を把握できていないディアナは、とにかく村の様子が知りたかった。

「村のみんなは……どうなったか知りませんか？」

長い沈黙のあと、アルはディアナの瞳を見つめながら、ゆっくりと語り始めた。

「まず、俺にお前の救出を頼んできたのは、アイラとかいう女だ」

「アイラさん……。良かった、無事なんだ……」

ほっと胸をなでおろすディアナ。

「ああ、かなりの深手を負っていたが命に別状ないだろう。そして、その女に言われた事がある」

ふたたびディアナを見つめるアル。息を飲んでその瞳を見つめ返すディアナ。

「お前が父親だと思っていた男は、本当の父親ではないそうだ。詳しく聞いていないが、あの女は、そう言っていた」

「……………！？」

絶句するディアナに構わず話を続ける。

「あの女が言うには、帝国が手に入れようとしていたのは、お前が持っている魔法の力だろう。俺もこの目で実際に見せたが、魔法自体に希少価値があるこの世の中で、念じるだけで術を発動させる魔法使いなんて、見た事も聞いた事もない」

話の中で父の様子について触れられていない事に、ふと気が付いた。

「お父さんは！？ お父さんは無事なんですか！？」

「お父さん……？」

すがり付いてくるディアナを見て、アルはディアナの親の事を語りながらアイラが見つめていた男の斬死体を思い出す。

「ああ、俺があの場合に着いたときは、既に死んでいた」

「そんな……！？」

アルの服を握っていた拳から力が抜け、その場にへたれこんだ。なかば放心状態のディアナに構わず、アルは更に話をつづける。

「俺は、お前の義父を殺した男に、ちよつとした恨みがある。お前を助けたのも、その方が俺にとつても都合が良さそうだったからだ。決して善意から行動したわけじゃない。だが、俺の中でお前の存在に利用価値があると感じるうちは、お前の事を守っていてやる」

まるで天地がひっくり返ったような思いだった。

ほんの数日前までは、何も変化もない単調な日々を繰り返していたし、それが永遠に続くと思っていた。それがある日、突如として終焉を迎え、大切な人たちがたくさん死んで、父親だと思っていた人間が本当の父親ではないという。拳句、帝国に捕らわれ、辱めを受けかけ、良く分からないうちにこの無愛想な少年に助けられ、今は、得体の知れない青年に保護され、何処とも分からぬ小屋の中にいる。

これは、夢なのではないかとさえ思えてくるが、時折からだを襲う鈍痛に、これが現実なのだと思しめられる。

自然と目から涙が溢れてきた。

アルは、泣いているディアナから、窓の外へと視線を流す。

そこへ再び青年がやってくる。

「食事の準備が整いましたよ。おや？ 泣かせちゃったんですか？」
「知るか」

目を細めてニッコリと微笑んだ表情をそのままに、眉だけ八の字にさげと言う青年に、アルはそっけなく答えるて部屋を出て行く。

「あなたは、どうします？ もう少し、一人でいますか？」

「いえ、大丈夫です。着替えてから行くので先に行ってください」
ディアナは、優しく穏やかな青年の言葉に、涙を拭いながらそう答えた。

オークウッド製のダイニングテーブルの上には、オートミールリゾットとサラダが用意されていた。

「お腹がビックリするといけないんで、メニューも軽めにしておきましたよ？」

そう言いながらリビングに戻ってくる青年。

「何も聞かないんだな」

先に食事を始めていたアルが、青年に向かって言った。

「ええ、私が知る必要もないことでしょう？」

席に着き、ほほえみのまま青年が言う。

この青年、『喜』以外の感情が無いのではと思うくらい、常に目を細めた微笑を浮かべている。それとも、ただ糸目だけなのか？
それから、しばらく無言で食事を続ける二人。

奥の部屋からドアが開く音が聞こえてくる。リビングのドアが開くと、膝下丈の白いローブを身にまとい、肩からフード着きの白いケープをかけたディアナが現れた。

ローブの裾や袖は、赤い糸で刺繍が施されており、鎖骨のあたりでボタン止めされたケープもローブに合わせたように赤い糸の刺繍がされている。

「やあ、似合いますね。サイズが合わなかったりしませんでしたか？」

「いえ、まるで測ったようにピッタリでした」

微笑しながら答えるディアナだが、赤く泣き腫らした目は、今まで泣いていた事を物語っている。その微笑みすら痛々しかった。

その二人のやり取りを見ていたアルは、ふと思った事を青年にぶつけてみることにした。

「あんた、ここで一人暮らししてるのか？」

「ええ、そうですね？」

「なんで、そんなに女性物の衣類があるんだ……？」

「ふふふ。それは、ヒミツです」

アルの無愛想なツツコミに対して、人差し指を自分の口元に当てながらそう答えた。

意味不明で納得が得られる回答ではなかったが、それ以上の興味を持ってなかったアルは、その先の質問やツツコミをスープと共に全て飲み込んだ。

「先に部屋へ戻る」

食事を終えたアルは、そう言っただけで席を立ち、部屋へと戻っていった。

部屋へ消えるアルを見送ったあと、青年は棚の上の木箱からペンダントを一つ取り出し、

「あなたにこれを差し上げましょう」

そう言いながらディアナに渡した。

「これは？」

「お守り……みたいなものですよ」

「お守り……ですか？」

「ええ、お守りです」

青みがかった銀のような素材で出来たペンダントには、翼の生えたローブ姿の美女が、地面に突き立てられた長剣の柄頭に両手を添えて立つ紋様が描かれていた。

「そのペンダントは、本来あなたが持つべき物ですからね」

「どういう意味ですか？」

「それは、ヒミツです」

青年は、ニッコリ笑顔のまま、口元に自らの人差し指を添えて、優しくそう言った。

「あなたは、これから様々な人と出会い、様々な体験をする事になるでしょう。その中で自分が感じた事を素直に受け止め、自分が正しいと感じたとおりに行動するのです。この世界では、善と悪を分

け隔てているものが非常に曖昧です。あなたが悪と感じた中にも善があり、善と信じている事が悪になりえるかも知れないのです。善と悪の定義というものも、立場や環境によって変わっていくもの。あなたは、それを見極めていかなければなりません」

表情をそのままに、真剣な口調で青年が語る。

「あなたは、何を知っていますのですか……？」

「それは」

その続きを青年より早く、ディアナが少しだけ微笑みながら後の言葉を続ける。

「ヒミツ……なんですよね？」

「はい、ヒミツです」

今まで以上の笑みで青年が答えた。

一人で部屋に戻っていたアルは、ベッドに腰掛けながら自分のダガーを見つめていた。

刀身には、まるで血脈が流れているような筋が刻まれており、時折そこから青い光が、まるで血液でも流れているかのように漏れ出ているように見える。

以前、葉月と探索した古代遺跡で拾った、見たこともない材質の金属片。

それは、鋼より硬くて軽く、刀より鋭く、まるで短剣の刀身のよ
うな形をしていた。

旧世界の携帯武器の一部なのだろう程度に思ったアルは、それを
持ち帰り、柄を取り付けてダガーとして使っている。

得体の知れない物を拾ったものだという想いと、強力な相棒を得たという想いを入り混ぜた表情でダガーを眺め続けていると、食事を終えたディアナが部屋に戻ってきた。

「夜が明けたら、すぐにここを出るぞ」

ダガーを鞘に戻しながら、そう告げる。

あまりに唐突な宣言に目を丸くするディアナ。

「あの男、どうも信用できん」

「でも、悪い人じゃなさそうです」

「敵ではなさそうだが、味方であるという保障もない。それに俺たちが落ちた場所は、帝国にも知られているはずだ。あの男の言葉を信用するのなら、ここに運ばれてから既に二日が経過しているということだ。長くこの場所にとどまっているのは、得策ではない」

「そう言われ、自分の目の前で繰り広げられた惨劇の映像がディアナの脳裏をよぎる。」

「……わかりました」

あの青年に迷惑をかけたくないという想いもあり、ディアナは、意を決するように頷きつづいた。

赤いカーペットが敷かれ、その両側に豪華な柱が並び立つ薄暗い回廊の中、青い法衣に身を包んだ男、ラジエネアが黒いダマルティ力姿の女からの報告を受けていた。

「積み荷が奪われたようです」

「そうですか……。して、積み荷の所在は……？」

大方の予想が出来ていたラジエネアだったが、返ってきた答えは、予想と違ったものだった。

「現在、行方不明です」

「行方不明……？」

かすかに眉をひそめ、おうむ返しするラジエネア。

「はい。何度も魔力探知をしているのですが、全く反応がありません」

「死んだ……というわけでも無さそうですね」

「はい」

しばし思案に耽っていたラジエネアだったが、やがて静かにこう告げた。

「シャウルさん。この事に関しての権限は、この先すべて貴女に与えます」

「はい。必ずや鍵を手に入れ、ラジエネア様の前へ差し出してごら

んになります」

その女は、そう言う口元に邪悪な笑みを浮かべた。

早朝、日の出とともに森の小屋を抜け出す二つの人影があった。

家主が目覚まされよう、細心の注意を払って扉を閉める。

アルは、当面必要になるであろう食料や道具を拝借し、同じく拝借したカバンに詰め込んで背負っていた。

「森を抜け、南西へ向かうと、ニックスファードという街があるそうです」

昨晚、青年から教えてもらった街の情報を、アルに伝える。

アルが方位磁石を取り出し、南西の方角を確認する。

「行くぞ」

アルが一言そう告げると、二人の姿は、木漏れ日が優しく差し込む木々の中へと消えていった。

出立（後書き）

と言う事で、ジエノクレスの遺産 Chapter 1 が終了しました。

面白かったですか？

Chapter 2までは、既に書きあがっているので、順次UPしていきます。

それ以降は、まだ執筆に至っておらず、3もプロットを纏めなきゃなあ……という状態です。

3話単位で大きく話を纏められたらなあと思って書いてます。

文章量としては、3話で文庫1冊程度に纏まるように意識してます。制限って、結構大事ですよ？

それがないと、ただダラダラと書き連ねるだけのものになってしまい、読者を疲れさせてしまいますから。

というわけで、次回からChapter 2に入ります。

桂はじめでした。

出会い

「ごつごつした岩の間を、砂埃が縫うように舞う荒野を歩く。龍の森を抜けると、そこには荒野が広がっていた。

ディアナが青年から聞いたとおり、南西に向かってひたすら歩き続けて、もう数時間経過しているが、ニックスファードの街が姿を現す気配はない。

「本当に南西と言ったのか？」

アルが疲れた表情をディアナに向け、疲労を滲ませた声で訊く。

「はい。森を抜けて三十分も飛べば、ニックスファードの街が見えてくるって……」

アル以上に疲労感をただよわせながら、ディアナは絞りだすような声で答えた。

「飛べば……だと!？」

そこで表現のおかしさに気付く。

「はい、飛べば……って、あっ!」

ようやくディアナも気付いた。

「くそっ、もつと早くに気付くべきだった……!」

つまり、三十分というのは、何か飛行可能な乗り物を使ってのことなのだろう。飛行可能ということは、スピードもそれなりになるはずだ。それを使って三十分飛び続けて、やっと『見えてくる』距離だということだ。

人間の足なら、どれほどの時間が掛かるのか想像に難くない。数時間歩き続けても、街の影すら見えてこないのも納得できる。

「ごめんなさい……」

申し訳なさげな上目使いで、アルを見つめながら呟く。

それに言葉を返すわけでもなく、アルは正面を見据えたまま無言で歩きつづけた。

あの青年は、恐らく何らかの移動手段を使って、街と森を行き来

しているのだろう。あんな森の中で一人暮らしをしても、なんの自由なく、物などが色々と揃っていたということにも頷ける。

いつ町に到着できるとも知れなくなり、怒り喚くのも無駄な体力の浪費と判断したアルは、ただ黙々と歩き続けることを選んだ。

そんなアルの背中を、ディアナは悄然と見つめながら、その後が続く。

更に一時間ほど歩き続けたところ、後方から一台のジープが、砂埃を巻きあげながら接近してくるのが見えた。

それに気付いたアルは、仏頂面のまま無言でディアナに歩み寄り、ケープのフードを無造作にかぶせ、押さえつけるように頭の上に手を置いた。

「なっ!?!」

「お前の耳は目立ちすぎる。人前では、常にフードで隠せ」

抗議の声を上げようとするとディアナを制し、アルがぶつきらぼうに言う。そして、右腕を正面に掲げ、サムズアップしながらジープの接近を待った。

そんなアルの立ち姿を見て、ジープが二人の前止まる。

運転していたのは、栗色の髪を背中まで伸ばした女だった。

「どうしたの？ 君たち……」

そう言いながら、二人の顔を覗き込むように見つめる女の顔は、まだ二十代前半くらいと思われる整った顔立ちだった。

「悪いんだが、この先の街まで乗せていってくれないか？」

アルがジープに歩み寄りながら言う。

女は、二人の事をしばし見つめた後、

「良いわよ。乗りなさい」

親指でジープの後部への乗車を促す。

ジープの荷台スペースへ、二人が乗り込むのを確認した女は、

「乗り心地、悪いだろうけど勘弁してね」

一言そう告げると、アクセルペダルをゆっくりと踏み込み、ゆるゆると加速させた。

五分ほど走り進めたところで女が口を開く。

「私は、キャロル。二十歳の独身よ。君たちは？」

聞かれてもいない余計な情報を付け加えながら名乗り、二人の自己紹介を促す。

「私は、デイ」

「悪いが、馴れ合うつもりはない」

反射的に自己紹介を返そうとするディアナを制し、そっけない口調でアルが言った。

「まあ良いわ」と苦笑しながら言ったキャロルは、アルの反応を見て大きな誤解をしたようだった。

「でも、駆け落ちは良くないわよお？ ああ、良いわねえ……。若いつてっつっ!!！」

「ちよっつ!!？ 駆け落」

目に星を浮かべ、日の出のような後光を浴びながら、乙女チックに両手を組み合わせて言ったキャロルの台詞に、思わず声を上げたディアナだったが、

「そういう事だ。だから、あまり詮索しないでくれ」

アルがその誤解をあっさりと肯定する。そして、

「誤解されたままの方が、こちらとしては都合が良い」

顔を紅潮させているディアナに、そう耳打ちした。

「それより君たち、どこから歩いてきたの？ この辺りは、ずっとこんな土地が続いているし大変だったでしょう？」

そう訊いてくるキャロルの口調からは、二人を詮索しようとする意図するものは感じられず、ただの好奇心からの質問なのだろうという事が伝わってきた。

「ここより北東にある、【龍の森】からです」

「龍の森……？」

おうむ返しに聞き返してくる。。

「さっきも言ったけど、この辺りは、ずっと荒野よ？ 森なんて存在しないわ？」

「何っ!？」

キャロルの言葉に反応したのは、アルだった。

「どうかした？」

「……いや、何でもない。そいつの言うことは、あまり気にしないでくれ」

怪訝な表情を振り向けてきたキャロルに、平常心を装いながら意味深な物言いと表情で答えたアルは、昨日の青年に対し、今更ながら得体の知れないものを感じていた。

そんなアルの態度にキャロルは、少し気の毒そうな視線をディアナに向けて、「そう……」と、答えた。

駆け落ちと勘違いされた拳句、かわいそうな娘と思われてしまったディアナは、憤然とながら流れる景色を眺めて続けた。

半刻ほど走ると、ニックスファードが見えてきた。

街の通りは広く、通りに面し赤い三角屋根の木組み建築の瀟洒な中層の建物が建ちならんでいる。街道には、道に沿って街路樹が植えられている。

今まで自分が暮らしていた村とはまるで別世界の景色に圧倒され、ディアナは目を丸くしながら辺りの景色をキョロキョロと見回した。ジープは街に入り、目抜き通りを抜け、中央広場へと差し掛かった。「ここで良い。止めてくれ」

アルがおもむろに声をかけ、キャロルはジープの速度を緩めながら、ゆっくりと路肩に寄せて止める。

「ねえ、どこか泊まるあてでもあるの？ なんなら私の所に泊まっても良いのよ？」

「いや、その必要はない。ここまで乗せてくれたことに感謝する」宿の提供を申し出るキャロルに、アルは無愛想な表情のまま、街の様子を窺いながら返答した。

「そう……。まあ、無理にとは言わないわ。でも、もしも何かあったら、ここに来なさい」

ダッシュボードからペンとメモ帳を取り出すと、自宅の住所と簡易地図を書いてアルに手渡した。

「ありがとうございます」

ジープを降り、キャロルにふかぶかと頭を下げ、礼をするディアナ。

「んーん、良いのよ？ ついでだったし。それより、彼氏君にしっかり幸せにしてもらおうのよ？」

キャロルはそう言うと、ウィンクを投げかける。

「じゃあ、機会があったら、またどこかで会いましょう」

そう言い残してジープを走らせ去っていった。

ディアナは複雑な表情のまま、ジープが見えなくなるまで手を振って見送る。

「行くぞ。グズグズするな」

アルはディアナの腕を掴み、強引に引いて移動を促した。

「痛っ！ 何を急いでいるんですか!？」

「周りを良く見る……」

言われて周りを見渡してみる。今まで景色に圧倒されて気付かなかったが、大きな街のわりに活気が無い。そして、街の住人に混ざって所々に帝国兵の姿が見える。

「……………」

「分かったようだ。なら、大人しく着いてこい」

状況を理解し、神妙な面持ちになったディアナの腕を引いて、アルはそのまま裏路地へと入っていった。

気だるそうに地べたに座る若者、固まっていたたむろするガラの悪い男たち、放置されたまま、野良猫に漁られるゴミなど、本当に同じ街かと問いたくなるほど、裏路地と表通りは、全くの別世界だ。

そんな裏路地を縫うように移動し、辿り着いたのは一軒の小汚い宿だった。

壁にぶら下げられている朽ちたプレートが、この建物が宿であるという事を辛うじて知らしめている。

アルは無言のままチェクインし、受付の胡散臭い男へ先払いの宿泊料を少し多めに払い、割り当てられた部屋へ向かった。

湿っぽい階段を抜け、カビと埃の臭いが混ざり合った廊下を歩きながらディアナが咳く。

「大きな街の宿泊施設の話聞いた事がありました、聞いていたものとイメージがかなり違いますね……。本当に、こんな場所に止まる気ですか？」

昔、父やアイラから聞いた街の宿と、今から自分が泊まるうとしている宿との相違に戸惑いながら、不安げな視線をいたる所に投げかける。

ディアナの言葉に相槌をするでもなく、アルは無言で歩き続けた。やがて、本日の寢床である、三階一番奥の部屋に到着した。突き当たりの壁には、ドアがあり、そこを開けると非常用の外階段へと続いているようだ。

ドアを開けると、簡易ソファーと粗末なベッド目に入る。一応、シャワーとトイレもついているようだ。

「こういう宿は、金さえ渡せば犯罪者や賞金首でも泊める。野宿じゃないだけマシだと思え」

アルは部屋に入るなり背中越しに言いはなち、簡易ソファーへ荷物を無造作に放り投げた。そして、ディアナに向きなおり、

「そのベッドは、お前が使える。俺は、情報を集めに外へ出る。良いか、勝手に出歩いたりするなよ？」

念を入れるように強く言いはなつ。

アルが情報収集に出かけたあと、ディアナは、一人でベッドに腰掛け天井を仰いで呆けていた。

シートが硬く、いかにも寝心地の悪そうなベッドだったが、それでも疲労が溜まった身体には心地良い。

汗と砂埃にまみれた身体を水で洗い流したかったが、部屋に備え付けられている設備の殆どが初めて目にするものばかりで、いまい

ち使い方が分からず、アルが戻るまで水浴びを断念する事にした。
耳障りな音を立てて天井扇が回っている。

腕で身体を支えながら天井扇を眺めていると、不意に外が騒がしくなった。

窓際に歩み寄って階下を見下ろすと、そこには人だかりが出来ていた。その中心には、一人の男の子と二人の帝国兵の姿。良く見ると、帝国兵達が男の子に暴行を加えている姿が見て取れる。

周りの人たちは、遠巻きにそれを眺めているだけで、誰も止めようとしなない。

「っ！」

その光景と村を帝国軍に襲われた時の光景が、ディアナの頭の中で重ね合わされ、気付いた時には部屋の横にあった非常階段を駆け下りていた。

フードをしつかりとかぶりなおし、非常階段の降り口付近で見えぬふりをしている男達を押しわけ路上に躍り出ると、帝国兵に蹴り飛ばされた男の子がディアナの足元へ転がってきた。

「大丈夫？」

かがんで男の子の背中にそっと手を当て、優しく問う。

「う、うん。何とかね……」

ディアナを見上げてそう答える男の子は、年のころなら十歳前後だろうか。髪と同じ茶色い瞳は、年相応の活発さを漂わせている。

男の子にニッコリと優しい笑顔を見せたあと、すっく立ち上がり、男の子の前に立ちはだかつて帝国兵たちと対峙する。

「まったく、良い大人が二人がかりでこんな小さい子に暴行を加えるなんて、恥ずかしくないんですか!？」

帝国兵たちをキッと睨み据えながら、ビシリと指差し言いはなつディアナ。

「そのガキがコイツにぶつかってきたんだぜ。見るよ、コイツの腕の骨が折れちまつてるじゃねえか」

もう一人の帝国兵を親指で指し、ディアナを小馬鹿にするように

ニヤニヤながら言い、相棒の帝国兵がわざとらしく腕を押さえ、半笑いを浮かべながら「痛え！ 痛えよ！」と叫んでいる。

「そんなわけないだろっ！？ オイラの肩が少し触れただけじゃないか！！」

「慰謝料よこせと言ったところ、払えねえとフザケたことを抜かしやがったからよ、大人をナメたらどうなるのかったのを、身体に教えてやってたつてワケよ」

帝国兵は男の子の抗議を無視し、ニヤケ顔のままに自分達の行動の正当性を主張した。

「それが、大人のすること！？」

「ああん？ 俺達がジランディア帝国の軍人だって、見て分かんねえのか？」

「忘れるもんですか、その軍服……」

俯き、ワナワナと震え、

「だから、よけいに……っ」

右掌に炎の球をイメージする。

「ゆるせないのよっ！！」

そう叫びながら、石を遠投するような動作で右手を放り、具現化した火球をニヤケ顔を浮かべた帝国兵に向けて投げ放った。

「ぬわっ！！」

火球をまともに食らい、衝撃で派手に吹っ飛ばされる帝国兵。

騒動を眺めていた者たちも、いつせいにざわめきだす。

「なっ！ て、てめえ！！」

腕を押さええて痛がる演技をしていた帝国兵は、相棒が吹っ飛ばされるのを見て驚愕し、憤怒にかられて剣を抜き放った。

その瞬間、不意に飛来した壺が後頭部に当たって、派手に砕け散る。壺が飛んで来た方向を見ると、そこにはアルの姿。

突っ伏す帝国兵の横をすり抜け、ディアナのもとへ駆けてきた。

「お前、あれほど……っ！」

「だって……」

自分を守るような形で立ちはだかったアルから、背中越しに苛立った声を投げかけられたディアナは、男の子の方へと視線を落として口ごもる。

「くそ……っ！」

後頭部に壺が当たった帝国兵が、毒つきながらよろよろと起き上がる。

そこへ火球で吹っ飛ばされた帝国兵が駆けつけ、

「おい、引き上げるぞ」

ディアナの方を睨みつけながら、相棒の帝国兵に耳打ちする。

「ちっ、覚えてやがれ！」

月並みの台詞を吐き捨て、帝国兵達はその場を走り去り、アルはその姿が通りの先に消えるまで、じっと見据え続けた。

それに合わせて野次馬達も我関せずといった表情で散っていく。

帝国軍とのトラブルに巻き込まれたくないのだろう。

少年の傍らにしゃがみこんだディアナは、治癒魔法を発動している。

「お姉ちゃん、ありがとう。それ、魔法だろ？ 凄いや！」

ディアナは微笑み、首肯を返す。

「ボウズ。怪我が治ったのなら、さっさと帰れ」

視線だけ少年に落とし、アルは冷たく言いはなった。

「ア、アルさん……っ！」

抗議の声を上げるディアナだったが、アルに睨み返されてしまい、首をすくめて黙るしかなかった。

「良いんだ、お姉ちゃん」

少年は、かぶりを振り、

「助けてくれて、ありがとう」

すっと立ち上がって、アルに対して深いぶかと頭を下げ、礼を言っただけで去っていった。

夜襲

「お前は、自分が置かれた状況というのを理解していないようだな」
少年が立ち去るのを見送り、しばしの間を置いてアルが冷たく言いはなつ。

「あれを見逃せって言つんですかっ!？」

「そっだ」

「そんなの出来ません!」

冷たく見つめるアルの目を睨み返したディアナは、自らの言葉に強い意志をかさねた。

「……………」

互いに睨みあい、天井扇の耳障りな音だけが部屋の中を包みつつむ。

「荷物をまとめる。今夜、ここを出るぞ」

沈黙を打ち破ってそう告げると、アルは装備品のチェックをはじめた。

もともと、大して荷物を広げていなかったこともあり、荷造りはすぐに終わる。

その後、夜になるまでの間、何ら言葉を交わすことなく過ごした。日が沈み、日中のうちにアルが用意しておいた携帯食糧で軽めの夕食を無言のまま摂り、日付が変わる頃に、部屋の横の非常階段を使って宿を抜け出す。

小路を抜け、大通りに出るための道へ抜け出ようとした時、大通りから差し込む光を背負い佇む人影を見つけた。

「ちっ、遅かったか」

それを見たアルが毒づく。

「こんな夜中に何処へ行くつもりだ……………」
人影が問いかけてきた。

二人の方へゆっくりと歩みより、その姿が徐々にあらわになってくる。

その姿は、ショートスパアを手にし、羽飾りで装飾されたシヨルダーガードを肩にはめ、その上からマントを羽織っていた。

首には、宝珠を連ねたようなネックレスをぶら下げており、鎧は身に付けず、獣毛で裏打ちされた衣装は、まるでどこかの民族衣装を連想させる。

「大人しく、その娘をこちらへ渡してもらおう。そうすれば、見逃してやる」

その人影は二十代半ば程の薄紫の髪の青年だった。

無表情のまま冷たい視線を投げかけて淡々と言いはなつ。

荷物をディアナに預け、すらりと剣を抜き放ったアルは、それを問いかけへの返答にした。

それを見た青年は、切れ長の目をすうっと細め、静かにショートスパアを構える。

その時、

「まてえ〜い！」

夜の静寂の中、何者かの声が高らかと響きわたった。

「帝国魔陣衆が一人！ 最強の忍術闘士スセリ、ここに見参っつ！」

空を見上げると、通り沿いに立ち並ぶ中層住宅の屋根の上、月光を背後に仁王立ちする人影ひとつ。

「手柄を独り占めしようとする不埒な輩に代わり、このスセリがそこなお嬢さんを頂戴仕り奉るう〜っつ！」

「……結局、敵か」

スセリと名乗った男の口上文句を聞いて、アルがぼそりと呟いた。スセリは、それを言い終わるや、「とう！」という掛け声と共に建物から身を躍らせ、何度も派手に宙返りを繰り返し、音も無く着地すると、二、三歩たたらを踏んだ。

「お前、今ふらつかなかったか……？」

思わずツツコミを入れるアル。

「何のつもりだ、スセリ」

冷たい視線をスセリに向け、青年は感情のこもらない声で問う。

アルのツツコミは完全に無視し、

「抜け駆けとは、感心できねえなあ、リバースよお」

顔に笑みを浮かべて青年に語りかけながら、ディアナに向かってゆっくりと歩き始めた。

「くっ、させるか！」

アルは剣を振りかぶり、一気に距離を詰めてスセリを袈裟に切り払う。

剣は、スセリの身体をしっかりと捉えてたように見えた。

「ぐあっ！」

肩口から血をしぶかせたのはアルの方だった。

「アルさん！！」

傷口を押さえて、膝をつくアルを目の当たりにしたディアナは、思わず叫び声をあげる。

何事も無かったかのように、まっすぐディアナを見据えたまま、ゆっくりと近づくスセリの足元に突然ショートスピアが突き刺さった。

「うお、あぶねえ！ 刺さったらどうすんだ！！」

「そのつもりで投げたんだ」

オーバーなりアクシオンを取って抗議するスセリに、リバースは冷ややかに言いはなつ。

「それが友達に対してする事か！」

「お前のような下品で野蛮な忍者もどきなど、友人に持った覚えはない」

「ほほう、この気品に満ち溢れた俺を、下品で野蛮と抜かすか……っ！！」

スセリの姿は、顔こそ露出させているが、黒装束で身を包み、その上から陣羽織を着用し、背中には忍者刀という、いかにも忍者の

頭目いったいでたちだった。

「とにかく、それは俺の得物だ。手を出すな！」

そう叫ぶと、何やら眩きながら右手で印をむすぶ。

すると、空間に歪みが生じ、そこから鋭く長いキバを持ち、こめかみのあたりから鋭い角が前方に向かってせり出した、漆黒の毛を持つ虎に似た二体の妖獣が姿をあらわした。

低い唸り声を上げながら、二体の妖獣はスセリのまわりを囲うように歩く。

「しばらく、その相手をしている」

リバースがそう言い終わると同時に、二体の妖獣がスセリに向かって一斉に襲い掛かった。

飛び退きざまに背中を刀を抜き放ち、スセリは妖獣の攻撃を防ぐ。その姿を尻目に、地面に刺さったショートスピアを引き抜いたりバースは、ディアナに向かって駆け寄ろうとした。

それを見たスセリが、妖獣の相手をしながらリバースに向かって苦無を放つ。

それは、リバースに当らず、月明かりに照らし出された彼の影に突き刺さるが、その直後にリバースの動きがピタリと止まった。

その隙にアルの元へと駆けつけるディアナ。

「怪我の治療を……！」

「そんなのはあとだ。良くわからんが、仲間割れをしているうちに逃げるぞ！」

治癒魔法を使おうとしてアルにかざした手を掴み、そのまま強引に手を引いて走りだす。

不規則に小路を曲がり、何個目かの丁字路に差し掛かったとき、

「こつちよー！」

建物の陰から声をかけてくる女の声。

「あんたは……！」

「説明はあとよ。さあ、ついてきてー！」

「どついつつもりか説明してもらおうか……」

女に連れてこられたのは、恐らく彼女の自宅なのだろう。

簡素だが生活感が溢れる部屋に入るなり、開口一番にアルが問い詰めようとする。

「アルさん……」

そんなアルを制止するようにディアナがぶつやき、

「キャロルさん、助けてくれてありがとうございます」

女に向かって礼の言葉を口にした。

「良いのよ。彼が不信を募らせるのも当然だわ。そうね、借りを返したかっただけよ」

「借りを返すだと!? あんたには、街まで送ってもらった借りはあるが、貸しを作った覚えはないぞ」

「息子が世話になったわ」

「息子……だと!？」

その言葉にアルは、より一層の不信感を募らせる。

「ボクの事だよ。お姉ちゃん」

「ああ、君は……っ!」

部屋の奥から出てきたのは、ディアナが夕方に助けた少年だった。

「改めて、息子のレイクを助けてくれてありがとう」

「ちよつと待て!」

思わずアルが声を上げる。

「あなたの息子、いくつだ」

「八歳だよ!」

キャロルの代わりに、レイクが元気良く答える。

「……あなた、たしか二十歳とか言ってたよな?」

「うふふ、女の子には、ヒミツが多いものなのよ」

おどけた声でキャロルが答え、

「母ちゃん、またサバを読んだんだね? 本当は、もうさんじ……」

言いかけたレイクの頭を問答無用でどついて台詞をさえぎった。

『……………』

アルとディアナの沈黙が見事に八毛る。

夜も遅いという事もあり、キャロルはレイクを寝かせるためにしばし退出し、ディアナはその間にアルに治癒魔法をかけた。

パツクリと裂けた肩の傷が、みるみると塞がっていく。

これには、アルも流石に驚きの表情を浮かべた。

傷もほぼ塞がりかけた頃にキャロルが戻ってくる。

「すごい、けっこう深手だったはずなのに、もう傷が消えちゃってるわ！ レイクから聞いていたけど、魔法って便利なものね。」

「魔法も万能というわけじゃないですけどね。死んだ人を生き返らせる事は出来ませんし、致命傷だつて治せません……。」

ディアナの治癒魔法を目の当たりにしたキャロルが素直な感想を述べ、それに対し目を伏せながらディアナが答える。

「ふ〜ん、そういうものなのねえ。でも、魔陣衆が出向いてくるなんて、あなた達、相当な有名人なのね……。」

「あの人達を知ってるんですか!？」

「ええ、あなた達を襲ったのは、魔陣衆の二人、妖獣使いのリバースと忍者マスターのスセリよ。」

キャロルの説明を黙って聞いている二人の瞳を見つめ、更に話を続ける。

「魔陣衆というのは、帝国の特務兵団の名前よ。その全容は謎に包まれているけど、さっきの二人は、行動が派手な事もあって、名前や能力がある程度知られているわ。」

「あなた、何者だ?」

アルがおもむろに口を挟む。

「知られていると言っても、一般人が普段の生活の中で知り得るような情報じゃないだろう? 俺達の事を助けたのは、あなたの息子を助けたからだけじゃないな? そろそろ本題に入ったらどうだ。」
言われたキャロルは、指で頬を掻きながら苦笑いを浮かべて、「そうね……。」と呟く。

「まず、荒野であなた達を拾ったことは、ただの偶然よ。これは、

嘘じゃないと誓うわ」

それから、ふうと一息つき、

「私は、この街のレジスタンスのメンバーなの。私の主な任務は、情報収集と、他の街のレジスタンスとの連絡役」

「なるほどな……」

ある程度、納得したような表情で頷くアル。

「レジスタンスの活動内容というのは、どのようなものなのですか？」

「あなたも見たでしょう？ 街の様子や帝国兵の横暴を。いつの日か、帝国からこの街を開放するために武器や仲間、情報を集めるのが主ね」

アルは目を瞑り、ディアナは胸の前で手を組み合わせてキャロルの話を聞き続けている。

「あなた達の事を助けたのは、レイクのことを助けてくれたからというのは、本当のことよ。でも、もしあなた達さえ良ければ、私達の仲間になってほしい。あなた達が仲間になってくれたら、とっても心強いわ」

「断る」

静かに目を開き、鋭い視線をキャロルへ投げかけ、アルはキツパリと言いはなつた。

だが、ディアナは瞳に強い意志の光を宿し、アルに向かってこう告げた。

「私はキャロルさんの仲間になろうと思います」

「勝手な事を言うな！」

「私達が二人きりで帝国に抗ったところで、出来ることなんてたかが知れていると思います。それは、さつき魔陣衆に襲われたときにも強く実感しました。それなら、キャロルさんの仲間になった方が、よっぽど現実的だと思うんです」

アルの目をじっと見つめ、ディアナが更に続ける。

「あなたは、私に利用価値があるから助けると言いました。でも、

それは私があなたの言いなりにならなければいけないという事ではない。私は、私の意志で戦います。もし、それでアルさんにとって私が利用価値のないものになってしまふのでしたら、ここでさよならです。短い間でしたが、今まで助けてくれてありがとうございました」

ディアナの瞳をしばし見据え続け、そのあと大きなため息を一つつき、アルは、

「良いか、俺は馴れ合いになる気はないからな！」
そう言っ て背中を向けた。

「ありがとう、二人とも」

「キャロルさんには、先に見せておきたいものがあります」

そう言っ と、ディアナは今まで目深にかぶっていたフードをはらりとはずす。

「これが襲われる理由と何か関係あるかは分かりませんが、私、普通の人と違った外見をしているんです」

「あら とつてもカワイイじゃない」

ぴんと立つ猫耳がフードの下から現れたのを見て、キャロルは感嘆の声を上げた。

「あんだ、随分とお気楽な人間だな……」

心なしかジト目気味な視線を投げつけ、アルが冷ややかなツッコミを入れる。

「褒めても何も出ないわよ」

「褒めてない……」

自分の姿を目の当たりにしたキャロルの意外な反応と、その後のやり取りを眺めてディアナは苦笑を浮かべた。

「そういえば、まだ名前を名乗ってませんでしたね。私はディアナです」

「アルだ」

二人の自己紹介をうんうんと頷きながら聞いているキャロル。

「二人とも、改めてよろしくね。明日、私たちのリーダーに会って

もらっわ。今日は、もう遅いから寝ることにしましよっ
そう言っつと、キャロルは二人を今夜の寝床へと案内した。

レジスタンス(前書き)

仕事など、ちょっと忙しくなって、更新が遅くなりました。

レジスタンス

翌朝、アルとディアナは、キャロルに連れられて地下の下水道を歩いていた。

靴音が水路に反響し、水の音と入り混じっている。

「キャロルさん、くさいです……」

「ちょっと、私がかさいみたいない方しないでよっ！」

悪臭がたちこめており、口の中へ臭気を取り込みたくないディアナは、言葉少なく文句を言い、キャロルから逆に怒られてしまう。

「なんで、わざわざこんなところに、アジトなんかを作ったんだ」

アルも流石にたまらなくなったのか、抗議の声をあげた。

「アジトって言ったなら、こういう場所って相場が決まってるでしょ」

「

「誰が決めたんだ。そんなこと」

「きつと、昔の偉い人が決めたのよ」

「……………」

そんなやりとりの中、おもむろにキャロルの足が止まった。

「……」

何の変哲もない壁を指してそう言つと、その壁を同じ間隔で三回叩き、

「我は汝、汝は我、我ら一つになりて敵を穿たん」

壁に向かってそう言った。

「呪文ですか？」

「ふふ、ただの合言葉よ」

キャロルがウィンクしてそう言うのと同時に、重たい摩り音を立てながら、壁の一部がゆっくりと開いた。

「さ、遠慮なく入って頂戴」

そう言つて、中へと招きいれる。

中に入ると、鉄製のハンドルが設置されている場所に。番人らし

きいかつい男が立っていて、二人のことを睨みすえていた。

「キャロル、こいつらは？」

「今、説明するわ。あなたも一緒にきてちょうだい」

力を込めてハンドルを回して壁を閉じると、男はキャロルと自分でディアナたちを挟むように、後ろへまわってついてくる。

奥へ進むと広い部屋があり、そこで複数の人間が雑談をしていた。天井の四隅と中央には、裸電球がぶら下げられ、部屋に入って左手壁に街の地図と水路図が貼り付けられている。部屋の中には、木製の大きな安テーブルが四つ置かれており、それぞれの卓で会話のグループが作られている。テーブル近くの壁には、闘志たちがそれぞれ愛用している武器が立てかけられている。

「キャロルさん、その娘だれー？」

両手にレザーグローブを嵌めた、いかにも軽そうな若い優男が、ディアナを見るなり声をかけてくる。

「みんな、聞いて！ 今日から私たちの仲間になる二人を紹介するわっ！」

優男を右手で制したキャロルは、大声でそう言って、その場にいらる全員の注目を集めた。

「おい、二人ともガキじゃないか」

豪快そうな大男が言う。

「うふふ。リーダー、人を見かけで判断しちゃダメよ？ この子たちはね……、なんと、帝国魔陣衆のスセリとリバスとやりあったくらいの実力者なのよ！？」

キャロルが胸を張って言った言葉に、部屋中が騒然とする。

「ほら、二人とも自己紹介しなさい」

二人の後ろから、ポンと背中を押すキャロル。

ディアナは、少し戸惑いをみせたあと、心の中で意志を固めて名乗り始めた。

「ディアナ・シーレンです。特技は、少しだけ魔法を操ることが出来ます」

それから、目深にかぶったフードを脱いで耳をあらわにし、
「あと、外見が少しだけ普通の人と違います」

目を伏せ、咳くようにそう言った。

「何それ、やだ可愛いっ！」

ショートカットの活発そうな若い女性が言う。

「可愛いじゃんっ！ オレはニコ。色々と宜しくね！」

最初にディアナへ興味を示した優男が、そう言いながらレザーグ
ローブを嵌めたままの手を差しのべ、握手を求めてきた。

「おい、新しい娘が入ってきたからって、いきなり手え出そうとし
てんじゃねーよ！」

ディアナが周囲の予想外な反応にキョトンしていると、ショート
カットの活発そうな若い女性がニコの後頭部を小突き、二人の間に
割っではいる。

「あたしはソニア。よろしくな。コイツには気をつけるよ？ 手だ
けは早いからさ」

「ひどいよ、ソニアさんっ！」

ソニアの言い草に、ニコは涙目で講義した。

「俺がリーダーのウォルターだ。そっちの小僧は挨拶なしか？」

どすの利いた声で、豪快そうな大男がアルを睨んで唸るように言
う。

「アルだ」

ウォルターを一瞥したあと、ぽつりと言って再び外方を向いた。

「他の人の紹介も、ちやちやっと終わらせちやうわねっ！」

二人の間に流れた険悪な空気を察したキャロルが、場の空気を和
ませようと自己紹介を終えていないメンバーを面白おかしく紹介し、
その場の空気を和らげる。

「そして、あそこ一人でぽつんといるのが、ブーメラン使いの
ソシユーよ。シャイでナイーブだから接し方に気をつけてね」

最後に紹介された気難しそうな中年男は、椅子に座ってたままこ
ちらのほうを見ようともしない。

「ソシユー、何か一言でいいから言つてよ」

キャロルが自己紹介の催促をすると、ソシユーはすつと席を立ち、ゆっくり二人の前へと歩いてくる。

「これはガキの遊びじゃねえ。大人しく帰れ」

そう言つと、ソシユーは再び座席へと戻つていった。

「ええつと……、そう！ せつかく新メンバーが入つたんだから、歓迎会つばいことをしましょう！」

再び重苦しくなつてしまつた空気を崩すため、キャロルはそう提案してみた。

テーブルの上に菓子類を広げ、それをつまみして飲み物を片手に皆が談笑している。

アルは壁に背中を預けながら、俺に話しかけるなという空気を放つているため、誰も彼に話しかけようとせず、それを見たキャロルを苦笑させた。

その代わり、ディアナの周りにはたくさん人が集まつていて、「その耳は本物なのか」「何か魔法を使つて見せてくれ」と、彼女を質問攻めしている。

ディアナが質問の受け答えをしながら、ふと部屋の片隅へ目をやると、ソシユーが誰と話すでもなく一人でコーヒーを飲んでいる。

「あの人、いつもあんなだから気にすんなよ」

ディアナの視線に気が付いたソニアが、ディアナの肩をポンと叩き、苦笑交じりでそう言つた。

そう言われると余計に気になり、ディアナは自分に群がる人たちに一言だけ詫びててその場を離れる。

「ここ、良いですか？」

ディアナはソシユーの向かい側の席を指し、周囲の輪に混ざらうとしない彼に声をかけた。

「……好きにしる」

一瞬だけディアナを見たソシユーだったが、一言だけ呟くと、再

び視線を彼女から外す。

「みんなと話したりしないんですか？」

椅子に座りながら、言葉のジャブを放ってみた。

「ソシユーさんは、なんでレジスタンスに入ったんですか？」

めげずに会話を続ける。

「あの」

「そこに居るのは勝手だが、俺に話しかけるな。俺はお前らを信用したわけでもないし、馴れ合う気もない」

ディアナをキツと睨んだソシユーは、ディアナの言葉をさえぎるように言った。

ディアナは少し悲しそうな表情を浮かべ、それを見たソシユーは、再びディアナから視線を逸らす。

「ねー。そういえば、ここから遙か南西にある村……クルトっていったかな？　そこが帝国軍に襲われて、魔法を使える変わった外見の女の子が連れ去られたって情報があったんだけどさー、それってもしかしてキミのことだったりする？」

おもむろに、ニコが明るく話しかけてきた。

「あ、オレはここで情報収集とかしてるんだよね」

少し照れたように頭を掻きながら、言葉を付け足す。

「クルト村……？」

こんなところで、自分が育った村の名前を聞くなどは、夢にも思っていないかったディアナは、言葉を反芻した。

「はい、それは私のことです。その時に父も大切な人も殺されまして……」

目を伏せてうつむき、ディアナはそのまま黙ってしまい、他の者たちも言葉を失ってしまった。それを見ていたソニアは、何やってんのよ、とニコの頭を叩く。

言葉こそかけないが、ソシユーもディアナのことを見つめている。そんな時、外壁を激しく叩く音が響いた。

「おい、開ける、開けてくれ！　大変なんだっ……！」

だが、番人は開けようとしなない。

「大変なんだって！ えいもう、我は汝、汝は我、我ら一つになりて敵を穿たんっ！」

外の男がしびれを切らして合言葉を言うと、番人が大きな鉄製のハンドルを回す。すると壁の一部が重たい磨り音を立てながら動き出し、壁が口を開いた。

それと同時に男が飛び込んでくる。

「落ち着け。何があつた」

ウォルターは、男に水を差し出しながら言った。

「て、帝国兵のやつらが街で暴れてやがるんだ。昨日の娘を出せとか、わけが分からない事を喚きながら！！」

息もたえだえに言うと、ウォルターから水を受け取って一気に飲みほす。

「昨日の娘って……」

「多分、私のことだと思います。昨日、帝国兵とひと悶着あつたら」

キャロルの呟きにディアナが答えた。

「もう、許してはおけん。ニコはアジトに残って留守を守れ。野郎ども、武器を持って！ これ以上やつらの勝手をゆるすな！！」

ウォルターの号令で、レジスタンスたちはそれぞれ得物を手にアジトを出ていく。

ソシユーもゆっくり席を立ち、壁に立てかけておいた身の丈ほどの巨大なブーメランを手にして外へと歩き出した。

「お前らは、ここで大人しくしている」

ふと立ち止まり、ちらりとディアナのほうへ視線を送ったソシユーは、静かだが強い口調で言った。

「いえ、私のせいでこうなつたんです。私も行きます！ 私だつて戦えますっ！！」

強い意志を視線に込め、ソシユーへぶつける。

その様子を見ていたアルも、半ば諦めたような表情で剣を手に取り

った。

「ソシユーさんの言うとおり、大人しく待ってたほうが良いって」「ニコはディアナをなだめるように、両手をひらひらさせながら口をはさむ。

ディアナとソシユーは、しばらくお互いに視線を交差させる。

「……………」

「……………っ！」

「好きにする」

ソシユーは、視線をそらしてそう言うと、再びアジトの外へと歩きだした。

会敵（前書き）

遅くなって申し訳ありませんっ！（汗）

会敵

「昨日の小娘を出せえ!!」

帝国兵が、露天の商品棚を蹴り散らかしながら叫んでいる。

気が弱そうな男性が、目が合ったというだけで、何か隠してるんじゃないかと言いがかりをつけられ、殴る蹴るの暴行を受けている。混乱に乗じて略奪行為を行っている兵士すらいる。

それでも街の住人は何も出来ず、ただその様子を眺めていた。

「ここいらの家屋全てをしらみつぶしに探せ！ 抵抗するやつは殺せ!!」

隊長風の兵士が、笑みを浮かべながら号令をかけ、それを合図にして、兵士たちがいつせいに散っていく。

何人かの兵士は、遠巻きに見ているしかない住人たちから、持ち物検査と称して金品を奪い、抵抗した者は、容赦なく斬り捨てられた。

「出てこい、小娘え！ お前のせいで街の住人たちが傷ついてゆくぞ!!」

号令をかけていた男が、通りに響き渡るほどの大声で叫んだあと、高らかに笑いだす。

「そこまでだ！」

闘士たちを引き連れて現場に駆けつけたウォルターは、巨大なハンマーを高らかに掲げながら叫んだ。

「あん！？ なるほど。お前はレジスタンスのメンバーだったのか」
包帯を巻いた兵士は、その一団の中に目当ての少女の存在を確認して、にやりと笑ってみせた。

「その小娘をこちらに引き渡せ。そうすれば、今日のところは見逃してやるぞ？」

不敵な笑みを浮かべながら、帝国兵がそう提案してくる。

「聞けない要求だな」

「ならば、力づくで奪いとるまでだ」

気が付くと、帝国兵たちが通りを回りこみ、レジスタンスを取り囲んでいた。

「ディアナちゃん、戦闘は私たちに任せて、あなたは怪我をしている人の治療をお願いね」

キャロルはディアナのそばへと歩み寄り、耳元でそう指示を出した。

こくりと小さく頷いたディアナは、すぐさま周囲に目をくばり、怪我をしている人の位置を確認する。

「男は殺せ！ 女は犯せ！」

それが戦闘開始の合図になった。

包帯を巻いた兵士の号令とともに、兵士たちが一斉に動く。

ブーメランを大きく振りかぶったソシューは、側面から襲いかかってきた兵士たちに向かって、それを投げ放った。

放たれたブーメランは、兵士を数人なぎ倒してソシューの手元へ戻ってくる。

「行け」

ソシューは振り向きもせず、ディアナに向かってぶつきらぼうに言う。見ると路肩でうずくまっている怪我人までの進路がクリアになっっていた。

「ありがとうございます！」

口早に礼を言ったディアナは、怪我人に向かって駆けだし、アルもそれにつづく。

怪我人に駆け寄ったディアナは、すぐさま手をかざして頭の中で傷が癒えてゆくイメージを膨らませた。

周囲では、剣戟の音と怒号が入り混じり、敵味方が入り混じった乱戦に突入していた。

一人の治療が終わると、ディアナはすぐに別の怪我人のもとへと駆けつけ、ディアナが治療に専念できるように、彼女へ群がる帝国兵は、全てアルが対処している。

戦況はレジスタンスが優勢に展開しており、献身的に魔法で怪我人の治療を行っているディアナの姿は、その場に居合わせた住人たちの目には救世主のように映った。

巻き込まれないようにと遠巻きに眺めていた住人たちからは、次第に声援が飛び交い始め、それは徐々に歓声へと変わっていく。

「て、撤退だ！ 退け、退けええ！！」

戦力の半分が戦闘不能に陥ったところで、隊長風の兵士がそう叫び、それを合図として、自力で動くことが出来る兵士たちは、ほうほうの体で逃げ去っていった。

レジスタンス側に、犠牲者は一人も出ていない。怪我をした闘志もディアナが一人ずつ治癒していく。

レジスタンスの勝利を目の当たりにした住人たちは、彼らを称えようと大きな歓声を送り、闘士たちもそれに答えるように勝鬨を上げた。

全長二百メートルの陸上戦艦が、多数の戦車を引き連れて、荒野を進んでいる。

艦名をベヒモスといい、帝国陸将が座乗する帝国陸軍の総旗艦である。その艦橋で豪華な全身鎧を身に纏った男は、どこまでも続く荒野を眺めていた。

「ナーシュ将軍。斥候から報告が入りました」

通信兵から渡されたメモを手に、瀟洒な簡易鎧に身を包んだ若い男がやってきた。

「ニックスファードで、我が軍の治安部隊とレジスタンスとの間で戦闘があったようです」

帝国軍が各地方都市に配置している治安部隊は、陸軍に所属される。

「うむ。ストールよ、詳細をたのむ」

「レジスタンス側の被害状況は不明ですが、こちら側には犠牲者が出ている模様です。未確認ではありますが、レジスタンス側に魔法

を操る者がいたようですね」

「ほう？」

ストールの報告を聞きながらナーシユは、口の端からこめかみに向かって鋭角で跳ね生えている髭の毛先を、指でつまんで整えている。

「それは、少々変わった外見をした少女だということです。もしや、先日ラーバス将軍の手から逃がれたという、例の少女ではないでしょうか？」

「ふむ、その小娘を捕らえることができれば、わしの評価も上がるというものだな！」

「皇帝陛下もお喜びになるつかと」

ストールの言葉を聞いて、にんまりと笑みを浮かべるナーシユ。

「よし、必ず生かして捕らえよ。ラーバスを出し抜いた小娘を捕らえ、帝国内外にわしの力を見せ付けるのだ！ がーっはっはっは」
ナーシユの笑い声は、しばらくの間、艦橋に響きわたっていた。

「今日は、お疲れ様だったわね。こちらに犠牲者が出なかったのは、ディアナちゃんのおかげよ」

アジトから自宅への帰路、キャロルが言った。

月明かりは、まるで今日の勝利を祝福しているかのようだ。

「いえ、私は自分出来ることを、精一杯やっただけです」

照れながら答えるディアナ。アルは、相変わらず仏頂面のままだった。

「ディアナちゃんは、私たちにとって勝利の女神みたいなものね。アル君もありがとうね。ディアナちゃんをしっかり守ってくれて」「こいつに居なくなると、俺が困るんでな」

アルは、言葉少なく誤解を招くような台詞をぶっきらぼうに返す。

「良いわねえ、恋ってっ！」

「だから、違いますってばっ！」

「ふふふ、二人がそういう関係じゃないっていうのは、昨晚のやり

取りで気づいてたわよ」

キャロルにからかわれたただけだと気づいたディアナは、ムツとした表情を浮かべてジト目を返した。

会話をしながら歩いていたらせいもあり、キャロルの家へは、あっという間に到着する。

「ただいま。今帰ったわよ、レイクう」

キャロルが明るい声でそう言いながら家に入ると、奥からレイクが神妙な面持ちで出迎えた。

「どうしたの？ そんな暗い顔して」

「うん、それが……」

レイクは、しきりに奥の部屋を気にしている。

「何？ 誰かいるの？」

部屋の奥に人の気配を感じたキャロルがレイクに訊いた。

「それは血か？」

アルは、薄暗い廊下に何かのシミが付着していることに気がついた。

「あれ？ レイク君の服についてるのも、もしかして血じゃない？」

薄暗くてよく見えなかったが、レイクの服にも赤黒いシミが付いている事にディアナが気づく。

「あんだ、怪我してんの？」

「あ、えっと、これはボクの血じゃないんだ」

歯切れの悪い返答に、ただならぬ空気を察したキャロルは、レイクを押しつけて部屋の奥へと入っていき、アルとディアナもそれを追う。

「あんだ、これ……」

部屋には帝国兵が身につけているクウィラスが転がっており、バフコートや女性物の下着も脱ぎ散らかされている。

そして、ベッドには、全身に包帯を巻かれた、アルと同じくらいの年頃の少女がうつぶせで横たわっていた。

茶色いセミロングの髪は血で汚れ、可愛い顔立ちは、苦悶で

歪み、今にも消え入りそうな細い呼吸をしている。

レイクが一生懸命やったのだろう。包帯の巻き方は、決して綺麗なものではなく、背中に刻まれた刀傷を隠しきれしていない。

「あんだ、自分が何をやってるか分かってるの!？」

「分かってるよ! でも、ほっとけなかつたんだ!」

ディアナは、とても複雑な心境だった。目の前に横たわっているのは、自分たちにとって敵である帝国の兵士である。だが、それは自分やアルと歳もほとんど変わらないような少女。ディアナは、無意識にこぶしを握り締めた。

「殺るか?」

「ま、待つてよ!」

剣の柄に手を添えながら、アルはキャロルに尋ね、それを止めようとして、レイクが柄に添えたアルの手にすがりつく。

キャロルは、ベッド脇にあるテーブルの上に置かれた、ロケットペンダントに気づき、それを手にとってチャームを開いてみた。

そこに貼り付けられている写真を見たキャロルは、小さなため息をつく。そして、ディアナに言った。

「ディアナちゃん。その子の治療をしてあげて」

「……え?」

「良いから早く!」

ディアナは、戸惑いと複雑な心境を胸に抱いたまま、少女の傷が塞がっていくイメージを思い描いて手をかざした。

少女の傷口がみるみる塞がっていく。

ディアナの額から汗が流れ、顎先まで伝ったそれが滴り落ちる。

治療が終わると、ディアナはへたりとその場に膝を折った。

「お疲れさま。あとは、この子の目が覚めるのを待ちましょう」

「母ちゃん、ディアナ姉ちゃん、ありがとう!」

「この子の面倒は、悪いんだけどディアナちゃんに任せるわ」

キャロルにそう言われ、ディアナは戸惑いの表情をかえした。

そのやり取りの様子を、アルは腕を組んで壁にもたれたまま、無

言で見守っていた。

帝国兵

柔らかな日差しが顔にあたり、小鳥のさえずる声が耳朶をつつ。ゆるゆると脳が覚醒し、意識が夢の中から現実へと引き戻されてゆき、瞳をゆっくりと開く。

「うっ、どっ……？」

見覚えの無い部屋が視界に飛び込み、まだ覚醒しきっていない頭を働かせようと寝返りを打とうとして、腹部にのしかかる重さに気づく。

首だけ動かして視線を落とすと、毛布の上から突っ伏すように眠る少女の姿が目に入った。

透き通るような金髪と、髪の毛より少し暗い色の毛が生えた大きな猫の耳。

状況が飲み込めず、とりあえず上半身を起こそうとして、背中に走る痛みにつめき声を漏らす。

「っ！」

不意に走った痛みのでいで、全身がびくんと跳ねた。

「う……ん」

腹の上で突っ伏していた少女は、目をこすりながら上半身を起こす。

痛みに悶絶していると、ネコ耳少女が立ち上がり、わたわたと部屋を出て行く気配がした。

「キャラルさーん、目が覚めたみたいですよっ！」

部屋の外から先ほどの少女のものと思われる声が聞こえてくる。

（あれ……？ 私、どうしてこんな所にいるんだろうっ！？）

痛みに耐えながらも、覚醒しきった頭のなかで記憶の整理を行った。

複数の足音が近づいてくるのが聞こえる。

「目が覚めたようね。気分はいかが？」

そう声をかけてきたのは、二十代前半くらいの女性。

「ディアナちゃん。この子、まだツライみたいだから、治癒魔法かけてあげて」

辛そうにしている姿を見て、一緒に戻ってきたネコ耳の少女に言う。

「ま……ほう？」

何か大事なことを失念している気がする。

女性に言われて、ディアナと呼ばれたネコ耳の少女が歩み寄ってくる。

ディアナは手をかざし、瞳を閉じてなにやら念じはじめると、彼女の掌から淡い光が放たれ、その光が全身を包み込む。

光に包まれた直後から、痛みが和らいでくるのが分かった。

「どお？ 少しは楽になったかしら？」

女性もベッドへ近づいてくる。

「私はキャロルよ。あなたの傷を魔法で治療してるのがディアナちゃん。あなたの名前も聞かせてもらえるかしら？」

治療を終えたディアナは、部屋の隅へと下がっていく。目には警戒の色がにじんでいるのが見てとれた。

「……サーシャ」

「サーシャちゃんね。お腹すいたでしょ？ 朝食が出来上がってるから、服を着てこっちへいらっしやい」

「服……？」

言われて自分の身体に視線を落とすと、素肌の上から包帯が巻かれているのが分かった。

「ゴメンなさいね。私の息子が巻いたんだけど、何を考えたのか、服を全部脱がしてから巻いたみたいなのよね」

手をひらひらさせ、キャロルは苦笑しながら言った。

「ペンダント……っ！」

肌身はなさず首から提げていた、ロケットペンダントが無くなっている事に気づく。

「ペンダントなら、そこにあるわよ」

キャラルは、ベッド脇のテーブルの上を指さして言った。テーブルの上には、女性物の衣類がたたんで置いてあり、その上にペンダントが乗せてあった。

サーシャは、それを見て安堵の表情を浮かべる。

「じゃ、リビングで待つてるわよ」

キャラルはそう言い残すと、ディアナを連れて部屋から出て行った。

リビングへ入ったディアナの目に最初に飛び込んできたのは、エプロンをつけてテーブルの上に料理を並べるアルの姿だった。

「アル……さん？」

「うるさい、何も言うな！」

戸惑いの色を浮かべ、声を絞り出すように呟くディアナ向かって、アルは声を荒げる。

「うちで面倒みる以上は、働かざるもの食うべからずよ」

人差し指をぴつと立て、ディアナへウイंकを送りながらキャラルが言う。

「それより、あの帝国兵の様子はどうなんだ」

そんな事には興味もないのだが、アルは話を逸らすために聞いた。

「今、着替えてるんじゃない」

「あ~~~~っつっ!!」

キャラルの台詞をさえぎるように、ベッドルームからサーシャの声が聞こえてきた。それと同時にリビングへ向かって駆けてくる足音。

「あ、あなた！ 隊長が言った女の子じゃないっつ!!」

バンと勢いよく扉を開いて部屋に入ってきたサーシャは、ディアナを指差しながらそう叫んだ。

あまりの出来事に目が点になる一同。

「っつという事は、もしかしてキャラルさんは……っ!!」

「えーっと、うん、私はレジスタンスの闘志よ。それより、私はちやんと言ったからね？　うちの息子があなたを全裸にしたって……」
「……へ？」

キャロルに言われて間の抜けた声を上げたサーシャは、改めて自分の姿を確認する。

素肌の上から包帯が巻かれ、その包帯も半分以上がずり落ちていて、肝心な部分は、全く隠せていない。

「き、きゃあああああつっ！！」

両腕で胸を覆い、その場に座り込むサーシャ。

「うーん、うるさいなあ……」

目をこすりながら部屋から出てきたレイクは、

「あ、兵隊のお姉ちゃん！　元気になったんだねっ！」

元気そうなサーシャの姿を見て、ぱっと表情を明るくして言った。

「あ、その子が犯人ね」

「良いから、早く何か持ってきてよっ！！」

近所に響きわたるようなサーシャの絶叫がこだました。

「改めて、よろしくね」

キャロルの服を着たサーシャがリビングへ戻り、食卓をかこみながらの簡単な自己紹介を経たあと、キャロルがにこやかな表情でサーシャに言った。

ディアナの目から警戒の色は消えず、アルはどこか気まずそうにそっぽを向き、サーシャは不機嫌そうに黙り込んでいる。

それから暫く、無言の時間が続いた。

「何で私を助けたんですか？」

サーシャがおもむろに口を開く。

「うーん、何でって聞かれても、なりゆきでこうなったとしか言えないわねえ」

そして、サーシャに事情を説明した。

「そうですか、この子が……」

そう呟きながら、サーシャはレイクを見る。

サーシャに見つめられたレイクは、照れたようなはにかみを見せた。

「それにあなた、悪い人じゃなさそうだったしね」

そう言いながらキャロルは、サーシャの首から下げられたロケットペンダントに視線を落とす。

「まあ、傷が完全に癒えるまで、暫くうちに居ると良いわ」

その方がレイクも喜ぶから、と食事を勧めながら満面の笑みでキャロルは提案した。

食事が終わると、アルはキャロルに半ば無理やり家事を手伝わされ、キッチンで皿洗いをしていた。

リビングに残ったディアナとサーシャは、お互いに距離をとって気まずそうに過ごしている。事情を知らないレイクは、そんな二人のことをきよとんとした表情で、交互に眺めていた。

「あ、あなたのその耳って、本物のなの？」

重苦しい空気に耐えかねたサーシャは、無理やり話題を見つけてディアナに振る。

「……そうだけど」

サーシャには視線を合わせようとせず、そっけない口調でディアナは答える。

「ディアナ姉ちゃんは、耳だけじゃなく尻尾だって生えてるんだよ」

そんな二人を知ってか知らずか、レイクが明るい口調で言った。

「へ、へえ。凄いわね。世の中には、変わった人間もいるのね」

「おかしな容姿ですいません。でも、あなたには、全く関係ないでしょう？」

サーシャの言葉に、思いつきりトゲのある言い方を返す。

ディアナが帝国兵とトラブルを起こし、そのおかげで、昨日は無理やり駆りだされた。そのうえ、こんな事になっている。それなのに、自分がここまで毛嫌いされるいわれはない。サーシャは、だん

だん腹が立ってきた。

「あ、あんたねえ！ 私が何をしたっていうのよ！！」

我慢が限界に達したサーシャは、溜まった苛立ちをテーブルに叩きつけ、その勢いで立ち上がってディアナを怒鳴りつける。

「はいはい、喧嘩はそこまです〜？」

手をパンパンと叩きながら、キャロルはゆっくりキッチンから出てきた。

「サーシャちゃん、ごめんね？ ディアナちゃんはね、住んでた村を帝国軍に襲われて、親しい人たちをたくさん無くしたの」

「そんな……っ！ だ、だからって何で私が……」

「うん、サーシャちゃんがかしたわけじゃないのは、じゅうぶん分かっているの。でもね、頭で分かっても心がついてこないんだと思うわ。だから、許してあげてくれない？」

椅子に腰掛けたサーシャと視線を合わせ、ゆっくりと言うキャロルは、まるで子供を諭す親のような素振りだった。それから、今度はディアナに視線を合わせる。

「ディアナちゃんも、あなたの大切な人たちを殺したのは、たしかに帝国軍かも知れない。だけど、それはサーシャちゃんがやったわけじゃないのよ？ 少し頭を冷やさない」

ディアナは、視線をキャロルから逸らし、こぶしをぎゅっと握り締めた。

「さて、話もついたところで、ピクニックにでも行きましょう」

「どっという流れでそうなる！」

ピツと指を立て、笑顔でそう提案するキャロルに、アルはキッチンから思わずツツコミを入れた。

五人はキャロルが運転するジープに乗って、街はずれにある小高い丘を目指していた。

レイクは、助手席で楽しそうに歌を口ずさんでいる。

「五人で乗ると、さすがに乗り心地悪いかも知れないけど、もう少

しだから我慢してねーっ！」

荷台部分に無言で乗っている三人に声をかけた。

ニックスフードへ来るときと違い、丘へ向かうにつれて、徐々に緑が増えていった。

キャロルの家から一時間ほど走ると、ニックスフードを見下ろせる高台に到着した。そこは、草原になっていて、その中にぽつんと一本の大きな木が生えている。

キャロルはジープをその傍に止めると、持ってきたレジャーシートを広げ、弁当を詰めたバスケットをその中央へ置いた。

「どう？ 眺めがいいでしょ？」

両手を腰にあて、キャロルは自慢げに胸を張って言う。彼女が自慢するだけあって、ここからの眺めは素晴らしいものだった。

街の周囲には荒野が広がっており、ビュートと呼ばれる岩が何本もそびえている。街から高台へ向かうにつれ、少しずつ緑が深くなっており、このあたりは草原になっている。そこを風が通り抜け、まるで草が波を打っているかのように見える。

『凄……』

その雄大なパノラマを目の当たりにして、ディアナとサーシャの言葉が見事にハモった。その直後、二人は気まずそうに背中を向け、黙り込んでしまう。

「さあ、いらっしやい。景色を眺めながらお弁当を食べましょう」

「朝食を摂ってから、まだそんなに時間経ってないだろ」

「アル君。小さいこと気にしてたらハゲるわよ？」

「お前は、少し気にしないと太るぞ」

「く……っ！」

レイクがディアナとサーシャの手を引いて、二人をレジャーシートへ招き入れる。アルは、木にもたれかかったまま景色を眺めている。

「ねえ、サーシャちゃん。あなたは、なぜ帝国軍に入ったの？」

サンドイッチが入ったバスケットを差し出し、キャロルはおもむ

るに尋ねてみた。

「一番の理由は、やっぱりお給料が良かったから……ですかね」

バスケットの中からサンドイッチを一つ取り出し、質問に答える。

「お給料？」

「はい。私には、病気の妹が一人いるんです。手術さえすれば病気は治せるらしいんですけど、手術には、お金がいっぱい必要で、うちは母子家庭だから、とてもそんなお金は払えません。かといって私にこれといったお金になりそうな特技もない。だから、自分の目の前にある選択肢の中から、一番お給料が高かったものを選んだんです」

サーシャの話に、ディアナはぴくんと反応した。

「妹さんは、おいくつなの？」

「八歳です」

「ボクと同じ年だね！」

サーシャの話を聞いていたレイクは、嬉しそうに言う。

「キャロルさん。私からも質問して良いですか？」

「母ちゃんの歳なら、さんじ……痛っ！！」

「なあに？ 言うてごらんなさい？」

レイクの頭をどついて黙らせ、キャロルはにこやかに聞き返した。

「いったい何が目的で、私をどうするつもりですか？」

「別にどうもしないわよ？ しいて言うなら、帝国兵がどんな人たちなのかというのを知ってもらいたい子がいたからかしらね」

そう言いながら、キャロルはディアナに視線を向ける。

「どう？ あなたが抱いてた帝国兵の印象とだいぶ違うんじゃない？」

キャロルは、ニコツと笑いかけてディアナに訊いた。ディアナは俯いて、キャロルから視線を逸らす。キャロルは、構わず言葉を続けた。

「あなたが見た帝国兵は、ほんの一部の例でしかなく、たいていの人は、サーシャちゃんみたいな普通の人の。あなたは、それでも

帝国と戦っていける？」

「いまさら、何で私の決意が揺らぐようなことをするんですか!？」
「大事なことだからよ？　そういう事を知ったうえで、それでも討てるという覚悟がなきゃ帝国と戦うなんて出来ないもの」

「そんなこと……」

キャロルは、おもむろに果物ナイフをディアナへ渡す。

「なら、ここでサーシャちゃんを殺せる？」

「ちよつ!？」

キャロルの台詞に、思わず動揺の声を上げるサーシャ。

「さつき、あんな話を聞いたばかりで、そんなの出来るわけないじゃないですかっ!」

「なら、アル君なら出来る？」

木にもたれているアルに話を振る。

「ああ」

「アルさん!？」

返答を聞いたディアナは、何の感情もなく淡々と答えるアルの姿にショックを受けた。

「冗談よ。でもね、人の命を奪うという行為に善も悪も無いの。それだけは覚えておいてね。立場や出会い方が違えば、友達になれる人だって大勢いるのよ」

そう言いながらキャロルは、ディアナの手から果物ナイフを抜き取りバスケットの中へ入れた。

「サーシャちゃん、驚かしてゴメンね」

「いえ、ちよつと生きた心地がしなかっただけです……」

サーシャは、冷や汗をぬぐいながらも、皮肉を交えて答えた。

「ええつと、あなたは帝国の悪い部分ばかりを立て続けに見ちゃったようね。その……、私が言ってもあまり意味が無いんだろうけど、帝国の人間がひどい事しちゃったみたいで……ご、ゴメンね？」

若干しどろもどろだが、サーシャは心からディアナに謝罪した。

「ううん。私こそゴメンなさい。帝国兵だというだけで、変な偏見

と敵意をむき出しにした態度とつちやって」

そう言って、ディアナはサーシャに手を差し出した。

「良いの。あなたが帝国を嫌うのは、仕方ない事だもの」

サーシャも差し出された手を握り返す。

「おい、馴れ合うのは勝手だが、その女が帝国兵である以上、また再び俺たちの前に敵として現れるかも知れないんだぞ。分かっているのか？」

「そうかも知れないけど、少なくとも今は敵じゃない。それで良いじゃないですかっ！」

「ちっ、勝手にしろ」

その後、時間は和やかにすすみ、夕方前にキャロルの家へと戻ってきた。

それからサーシャは、三日ほど滞在することになった。

キャロルはサーシャをレジスタンスのアジトへも連れていった。

サーシャは、レジスタンスのアジトへ行くことに抵抗をしめした。

彼らとの戦闘で大怪我をしたのだから、当然の反応だろう。

キャロルは、そんなサーシャに闘士たちの普段の姿を見てもらいたいからと説得し、なかば強制的にアジトへ連れて行った。

キャロルが仲間にサーシャのことを親戚の子だと紹介すると、彼らはディアナが紹介された時とほぼ同様の反応をしめした。ニコにいたっては、全く同じ反応をして、やはりソニアにどつかれていた。ニコに対するソニアの行動を見ると、彼女がニコに対して好意を抱いているのだろうというのは、容易に推測できた。

レジスタンスという過激な団体の所属する人間に対し、サーシャは少なからず偏見を持っていた。

しかし、実際に彼らと触れ合い、自らが抱いていた偏見が間違っていることを知った。

キャロル宅にかくまわれてからの数日間は、サーシャの中の価値観が大きく変わるきっかけになった。

それはまた、ディアナにとっても同じことが言えた。

完全に傷が癒えたサーシャは、原隊に復帰するため、部屋で軍服へと着替えていた。

「ねえ、サーシャ。あなた、私たちの仲間にならない？」

そんなサーシャの様子を部屋の入り口で見ていたキャロルは、おもむろに口をひらいた。

「せっかく分かり合えたんだし、ディアナちゃんとの間にあったわだかまりも無くなったし、レイクも良く懐いてるし」

だが、その言葉にサーシャは首を振った。

「正直、すぐ後ろ髪ひかれる思いなんです、やっぱり、私は軍に戻ります。私には、私が守るべきものがあるんです」

そう言ったサーシャの瞳には、強い意志が宿っていた。

「そう……、残念だわ」

「今の帝国は、私から見ても少しおかしいと思います。下級兵士の私には、何の力も権限もありません。それでも私が出る範囲で、出来ることをしていこうと思います」

「ふふ、その言葉が聞けただけでも嬉しいわ」

サーシャの言葉を聞いて、キャロルは微笑みを浮かべる。

「数日、姿をくらませてたんだから、怪しまれないと良いけど」

「それならば、心配ないと思います。仕事をサボって数日間無断欠勤する先輩は、ぜんぜん珍しくないので。ちょっと怒られるだけで済むと思います」

苦笑しながらサーシャは答える。

そして、ディアナたちに別れの挨拶をすると、サーシャはキャロルの家をあとにした。

陸将

その日、ディアナは一人でレジスタンスのアジトを訪れていた。アルはキャロルに無理やり連れ出され、買い出しの手伝いをさせられている。

先日の戦闘以来、ディアナはちょっとした有名人になっていたが、それでもフードを目深までかぶれば、街の人たちに気づかれることは殆どなかった。

下水路をとおり、アジトの入り口まで行き、壁を三回叩いて合言葉を言う。

いつもなら、すぐに開くはずなのだが、今日は開く気配がない。

ディアナは、もう一度壁を三回叩いて合言葉を言った。すると、やつと壁が動きはじめる。

「お前一人か？」

入り口をあけてくれたのは、ソシユーだった。どうやら、他のメンバーは居ないようだ。

「みなさんは？」

「出ている」

ソシユーに訊いてみたが、そっけない返答が帰ってきただけだった。

普段から他のメンバーにもこんな態度なのだが、ディアナのことは、特に意識して遠ざけているようにみえた。

「ソシユーさん、私が嫌いですか？」

思わず訊いてしまう。

足を止めたソシユーは、ゆっくり振り返り、ディアナへ視線を投げる。

ディアナの瞳をじっと見つめ、そして一言、「ああ、嫌いだ」と言っていて、いつも座っている部屋の隅の席へと向って再び歩きはじめた。

そんな時、ドンドンと入り口の壁を叩く音が響く。

「大変だ、開けてくれっ！ 我は汝、汝は我、我ら一つになりて敵を穿たんっ！！」

合言葉を確認したディアナは、壁を開くための鉄製のハンドルを回そうとするが、重くてビクともしない。

「どけ！」

ディアナを押しつけ、ソシユーが力を込めてハンドルを回すと、ゆっくり壁が開き始めた。

「落ちつけ。何があった」

ソシユーが飛び込んできた男に訊く。

「て、帝国の大部隊が街のすぐそこまで来てるんだっ！」

「何っ！？」

「ベヒモスの姿も確認したから、陸将が直々においでのようなだ」

話を聞いたソシユーは、壁に立てかけておいた愛用のブーメランを背負うと、アジトを駆け出ようとする。

「おい、何処に行く気だ！？」

「決まってる。足止めだ！！」

「一人で何が出来るんだ！！」

「うるさいっ！ お前はここに残ってる！！」

ソシユーの肩を掴んで止めに入った男の手を振り払い、再び駆け出す。

「待ってください、私も行きますっ！」

「邪魔だから来るな！」

「いえ、行きますっ！！」

「……………好きにしろ！ だが、危なくなったら、すぐに逃げろよ！」

ディアナの目を見て、説得は無駄だと判断したソシユーは、そう言つとディアナと共に駆け出ていった。

「あれがニックスファードの街か」

陸上戦艦ベヒモスの艦首甲板上で、ナーシユは腕組をしたまま呟いた。

「この街のレジスタンスが、近隣の街のレジスタンスとの橋渡し役になっているとの情報です」

やや後ろに控えて立つストールは、あらかじめ斥候から得られた情報をナーシユに伝えた。

「ストールよ。なるべくレジスタンスに手を出さないように伝達しろ」

「は……？ それはどういう意味で？」

「出来る限る交戦を避けるということだ」

ストールには、ナーシユの言葉が理解できなかった。元々の作戦は、近隣の反帝国組織の中心となっていてこの街のレジスタンスを潰し、近隣の反帝国組織を孤立させるというものだったはず。いざとなれば、街ごと破壊することも視野に入れての大部隊なのである。「話をしたいのだ」

これだけの大戦力を見せつけながら話をするというのは、相手からしてみたら脅迫でしかない。しかも、相手にしてみたら、将を討つ絶好のチャンスでもある。

（この人は馬鹿か？）

ストールは心の中で呟いた。

「將軍、進路上に人影があります！」
伝令がそう告げた。

双眼鏡を受け取って覗いてみると、そこには、身の丈ほどの巨大なブーメランを持った男と、フード付きケープを目深までかぶった少女の姿。

会話までは把握できないが、男が少女に何か言っている。

「あれは何だと思う？」

ストールに双眼鏡を渡し、ナーシユは不思議そうに尋ねる。

「レジスタンス……でしょうか？ 何やら揉めているようですが」
この大部隊にたった二人で立ち向かってくるというのは、正気の

沙汰ではない。だが、それ以外に思いつく答えもなく、ストールは半信半疑のまま答えた。

男がからだを後ろにひねり、大きく振りかぶってブーメランを投げつけた。

それは、まっすぐとナーシユへ向かって飛んでくる。ナーシユは、首を少し動かしたただけであっさりと避ける。

「がーっはっはっは！ そんな攻撃がはあー！！」

ナーシユの顔の横を通過したブーメランは、そのままUターンするように大きく軌道を変え、高笑いを上げているナーシユの後頭部へと襲い掛かった。

「しょ、將軍っ！！」

「し、心配いらん！ それより、そやつらを生け捕りにしろ！！」
後頭部にブーメランをめり込ませたまま、ナーシユは慌てて駆け寄るストールに命じた。

ストールがスピーカーマイクに向かってナーシユの命令を復唱すると、陸上戦艦ベヒモスの搭乗口から十数人の陸戦隊員が湧き出し、進路上に立ちはだかった二人を取りかこむ。

多少の抵抗はあったようだが、選りすぐりの陸戦隊員の前に成すべなく拘束されたようであった。

「何だつて！？」

ニコの胸ぐらを掴みあげたウォルターは、感情に任せて怒鳴りつけた。

「り、リーダー……。オレは情報を持ってきただけなんだし、オレに怒りをぶつけたってしょうがないよ！？」

胸ぐらを掴みあげられたまま、両手でなだめるような仕草をして、ニコは苦笑いを浮かべながら言った。

「あの直情バカがつ！」

アルは、舌打ちをしてテーブルに拳を叩きつける。

「よりによって、ベヒモスに捕らえられるなんてね」

額を手をあて、ため息をつきながら言うキャラル。

「どうすんだよ。あたしらだけで助け出せるのか？」

ソニアの言葉に全員が黙ってしまう。

「俺は一人でも行くぞ」

沈黙を破ったのは、アルの一言だった。

「いくらなんでも無謀よ！」

「無謀なのは承知のうえだ」

「アル君、そこまでディアナちゃんのことを……」

「勘違いするな。俺にとって、あいつの存在は、それくらいの危険を冒すだけの利用価値があるというだけだ」

一人で盛り上がっているキャラルに対し、アルは冷たく言いな
つ。

「確かに、我々にとっても彼女の存在は大きい……」

ウォルターが呟く。存在は大きいのが、組織の壊滅をかけてまで救うほどの価値があるかは微妙　というのが本音である。

結局、誰からも妙案が生まれにくくはなく、アルが一人で淡々と身支度していいると、入り口の向こうから合言葉を言う声が聞こえてきた。

入り口が開かれる重たい磨り音のあと、声の主が部屋の中へ駆け込んできた。

ディアナとソシューは、地上戦艦ベヒモス内にある捕虜収容施設へ監禁されていた。

三メートル四方の小部屋で、入り口部分は鉄格子となっている。

その向かい側の壁には、明り取り用と思われる小さな窓が一つ、天井から近い位置についている。

「なぜ、逃げなかった」

ここへ運び込まれてから、ずっと無言だったソシューがおもむろに口を開いた。

ジランディア帝国軍の大部隊を前にした時、彼はディアナにすぐ

に逃げるよう言ったのだ。しかし、彼女はそれに従おうとしなかった。

「それは、ソシユーさんが逃げようとしなかったからです」

ソシユーに逃げるよう言われた時、ディアナは彼も一緒に逃げるという事を条件として提示したのだ。

「私には、ソシユーさんが死に急いでいるように見えたんです」

そんな人を置いて行けません、とディアナは言った。

「知ったような口を叩くな」

ディアナを睨み返すソシユーだったが、ディアナにじっと見つめ返され、思わず視線を逸らす。

不意に遠くで鉄扉が開く音がひびき、そのあと看守と誰かの話し声が聞こえてきた。

その後、金属が擦れ合うような重い足音がゆっくりと二人のほうへと近づいてくる。

姿を現したのは、豪華な全身鎧に身を包んだ男。口の端から頬骨のほうへ急激な角度で跳ね上がった髭の先を指でつまみながら、ディアナとソシユーを値踏みするかのように足先から頭の先まで睨めまわす。

「ナーシユ・フィールドル……」

ソシユーが男の名を口にする。

「ほう、ワシを知っているのか。辺境の街のレジスタンスにまで名が知れ渡るとは、ワシもつくづく有名なだな」

そう言って、ナーシユはガハハと笑ってみせた。

「……誰ですか？」

ディアナの言葉に、高笑いしていたナーシユはズルツとこける。

「ジランディア帝国軍、四將軍の一人、陸将ナーシユ・フィールドルだ。帝国陸軍の最高司令官さ」

ディアナは、改めてナーシユを見た。ディアナの視線に気付いてポーズを取っている男からは、自分の村を襲ってきた帝国軍の司令官のような、周囲の者を畏怖させるような威圧感を感じられない。

「それで、帝国陸将ともあろうお方が、俺のような下賤な人間に何の用だ？」

「ワシはな、レジスタンスと話し合いをしにきたのだ。お前たちのリーダーと話がしたい」

「街一つを完全に消滅させられるほどの戦力を引き連れてきて、話し合いをしたいただと？ 帝国では、武力で相手を脅迫することを話し合いというらしいな」

「治安維持という側面もあるのでな」

「それなら、街に駐留している治安部隊の教育からやり直すんだな。ここで治安を乱しているのは、お前ら帝国の兵士たちだ」

しばし、両者はにらみ合いを続ける。

「まずは、街に駐留している帝国兵を全て撤退させる。話はそれからだ」

「さすがにそれは無理な話だ。だが、我々も末端の兵の腐敗ぶりは聞き及んでおる。今回は、それを改善するべく」

「口では何とでも言える。まずは行動で示せ。話はそれからだ」

食い下がるナーシュの言葉をさえぎり、ソシユーはきっぱりと言いつ放った。

「まあ、すぐに結論を出さずとも良い。少し考えてみてくれ。お前に仲介役を頼みたいのだ」

「待て！」

立ち去ろうとするナーシュを引き止める。

「こいつは関係ない。この娘をすぐに解放しろ」

ソシユーは、ナーシュの目を睨みつけたまま言った。

「それは出来んな。その娘には、別件で用があるのでな」

ナーシュは、そう言うときびすを返し、ソラレットとグリーンブばかり合うつちやきちやきという金属音を響かせながら、ゆっくりとした足取りで去っていった。

ナーシュとソシユーのやり取りを横で見ていたディアナは、ナーシュからこちらを騙そうという意図が感じられなかった。

「ソシユーさん。私、ナーシユ將軍が悪い人に見えませんでした。もしかして、こちらを騙す意図はなく、本心で言ってるんじゃないでしょうか？」

ディアナは、ソシユーに感じ取ったありのままの印象を伝えた。「恐らくな。ナーシユという男は、バカだが策謀などを嫌う、良くも悪くもまっすぐな人物だと聞く。だがな、やつがそう思っていたとしても、それを実行できるだけの行動力がなければ意味がないんだ。少なくとも、やつにはそれを実行するだけの能力が備わっていない」

「でも、仮にも將軍なんですよな？」

「高い地位の人間の全てが、秀でた能力を持っているわけじゃない。帝国陸軍は、やつの副官であるストール・オルブライトが切れ物だから何とかやってられてるのさ」

ナーシユが消えた先を見据えながら、ソシユーは吐き捨てるように言った。

「でも、もしかしたら、その副官という方も悪い人じゃないかも知れない」

「善人だという確証もない。どうした。お前、帝国が憎いんじゃないのか？ 何かあったのか？」

ほんの数日前、ディアナが初めてアジトに来たときは、明らかに言動や思考が違っていることに違和感を感じたソシユーは、思わず訊いてしまう。

「実は……」

ディアナは、サーシャの事や彼女と触れ合っただけのことを、ありのままソシユーに打ち明けた。

「あの小娘……、帝国兵だったのか！ そんなやつをアジトにまで連れてきて、キャロルは何を考えているんだ！？ その帝国兵が仲間にアジトの場所を知らせたらどうするつもりだ！！」

「サーシャは、そんな事しませんっ！！」

ソシユーの物言いに、思わず声を荒げてしまうディアナ。

「なぜ、そう言いきれぬ？」

「それは……っ」

根拠なんて無かった。サーシャと過ごした数日間、彼女から感じ取ったものがディアナの心の中で蓄積し、そう結論付けたのだ。だが、そんなものは、理由として相手を説得させるだけの効力など何も持っていない。だから、ディアナは口ごもってしまった。

その後、二人は無言のまま時を過ごした。

奪還作戦

遠くで話し声が聞こえる。見張りが交代するようだ。

暫くして、足音が急速に近づいてくる。見張りの兵士がディアナたちがいる牢の前に駆け込んでくる。

「ディアナ、助けに来たよ！」

目深にかぶったモリオンの先端を指で持ち上げ、見張りの兵士が言った。

「サーシャ！」

「しーっ！」

思わず声を上げて喜ぶディアナを、サーシャは自分の唇に人差し指を当てて静かにするよう促す。

牢の鍵を開けたサーシャは、二人分のバフ・コートとクウイラスを差し出した。

「その服の上から出いいから、これを着て！ ヘルメットは、ここに入り口に掛けてあるから、適当に使って！」

サーシャの言葉に従い、ディアナは牢を出るが、ソシユーはそこから動こうとしなかった。

「あなたも早く！」

「何を企んでいる」

ソシユーは、サーシャを睨みつけて言った。

「何も企んでないわよ！」

「俺たちを助けて、お前になんの得があるというんだ？」

「友達を助けたいと思っただけよ！ それ以上の理由が必要？ 時間がないんだから早くしてっ！」

口早に急かす。

「ソシユーさん。私はサーシャを信用します。だいいち、既に捕らえられている私たちを罠にはめる必要がありません」

「俺たちを泳がせて、アジトを突き止めるつもりかも」

「それなら、こんなまどろっこしい事をしなくても、サーシャが案内すれば良いだけの話です！」

ディアナの言葉は筋が通っており、ソシユーを説得させるのに十分な要素を含んでいた。

「キャロルさんたちと連携してるんだから、早くして！ この艦の内部見取り図だって、ニコさんが用意してくれたんだからっ！」

ニコは、戦闘では役に立たないが、情報収集、特に帝国軍の機密事項を探るのに優れている。陸上戦艦の見取り図を入手できるとすれば、ソシユーが知る限り、闘士の中ではニコくらいだろう。

「ソシユーさん！ 私たちが急がないと、レジスタンスのみんなが危険です！」

「くっ、やむをえん！」

ディアナとソシユーは、サーシャに指示されたとおり帝国兵に成りすまし、モリオンを目深までかぶって素顔を隠す。

三人は不自然にならないように、出来る限り堂々と歩いて艦内を移動した。

クルーとは何度かすれ違ったが、これだけ巨大な艦だと乗組員全員が顔見知りというわけでもないらしく、三人の事を不審者と思う者はいなかった。

「上手くいきそうだね」

「まだよ。まだ油断しちゃダメ」

サーシャは、気が緩みはじめたディアナに注意を促す。

「むっ!？」

最初にその存在に気付いたのは、ソシユーだった。通路の向こうからゆっくりと歩いてくるナーシュの姿。

「やばっ！ 二人とも、私を真似て敬礼してっ！」

サーシャはそう言うと、拳を握った右手を左胸に当て、ぴっと背筋を伸ばしてナーシュが通り過ぎるのを待った。

だが、ナーシュは、サーシャの前で立ち止まる。

「んん!？ うん……」

ナーシユは、唸りながらじろじろとサーシャを見回した。

今にも飛び掛りそうなソシユーは、ディアナが必死に抑えている。

「新兵か？」

「は、はいっ！」

心臓が飛び出しそうなのをこらえ、冷静に受け答えようとしたサーシャだったが、思わず声が裏返ってしまった。

「そうか……、うむ……」

そう言うとナーシユは、髭先を指でつまみながら再び全身を嘗め回すようにサーシャとディアナを見つめる。

のどが鳴り、汗がふき出すサーシャ。

「お前たち……」

「は、はいっ！」

「今晚、ワシの部屋へ来い。ワシの武勇伝をたっぷり聞かせてやる」

ナーシユは、にんまりと笑ってそう言うと、再び通路を歩き始めた。

全員が胸をなでおろす。

台詞の裏に別の意図があると感じたディアナは、ナーシユを見損なっていた。だが、そんなディアナとは裏腹に、

「くう！ ナーシユ將軍から直々に武勇伝聞けるチャンスだったのにつっ！」

サーシャは予想外の台詞を言った。

「おい、あの場合、部屋へ行ったら手籠めにされるとかいうパターンだろ」

思わずソシユーがサーシャに言った。

「將軍はそんな事しないわ！ 將軍の武勇伝は、帝国陸軍の新兵の間じゃ有名なんだからっ！」

「……………」

ディアナとソシユーの無言が八モる。

「とにかく、危機は脱したわね。今のがストール副将だったら、間

違いなくバレてたわ」

そして、三人は再び移動を開始した。

途中、ロックされた扉などが存在したが、サーシャが腰に下げた短剣を扉に近づけると、剣身がぼんやり光ってあっさりと同錠される。

「凄いでしょ？ これ。 アルさんが貸してくれたんだけど、ディアナを飛空船から救出するために船内へ潜入しようとしたとき、入り口にこれを近づけたら、勝手に開いたんだって」

そう言いながら、アルから借りたという短剣を見せる。

剣身に刻まれた血管のような筋をなぞるように、ときおり青白い光が漏れ出ていた。

短剣から漏れ出た光を見たディアナは、まるでそれが悪意の固まりであるかのように感じ、言い知れない恐怖を感じ、生唾を飲み込む。

「そろそろね。二人とも、何かにつかまっでいて」

短剣を鞘に戻すと、サーシャはそう言って壁の突起につかまった。サーシャに言われるまま、ディアナたちも配管などにつかまった。

不意に爆発音がとどろき、振動が三人を襲う。

艦内に非常事態を知らせるサイレンが鳴り響き、第一級戦闘態勢を知らせる赤色等が点灯した。

サーシャは、再び短剣を抜き、それを壁に近づける。壁がプシュンと音を立てて左右に開き、そこから外の流れる景色と状況がうかがえた。

「何事だ!?!」

陸上戦艦ベヒモスのブリッジ内にナーシユの怒声が飛ぶ。

「敵襲です！ 煙幕を焚きながら隊列の間を小型車輛で縫いまわり、それを狙って撃った味方戦車の流れ弾が艦に当たったようです！」

艦橋の外を見ると、ベヒモスの右舷前方から煙が上がっているのが見えた。

「被害状況の報告と全軍に砲撃を控えるよう徹底させる！ この状況下で砲撃すれば、同士討ちになるぞ！」

味方の無能さにうんざりしながら、ストールはすばやく指示を飛ばす。

幸いベヒモスの被害は、右舷が小破した程度で済んでいるようだ。

「レジスタンスか」

ナーシユは、重々しい口調でストールに尋ねた。

「おそらく、そうでしょう」

「ここからでは、様子が分からん。甲板に出るぞ！」

ナーシユは、そう宣言すると、ストールの制止も聞かずに艦橋を出ていく。

ストールは、仕方なくライフル銃を手にした衛兵を引き連れて後を追った。

煙幕の切れ目から、戦車の隊列を縫うように、バイクやジープ、バギーといった小回りが利く小型車輛が縦横無尽に走り回っているのが見える。

「これは……」

「ディアナ救出作戦よ」

ディアナのつぶやきにサーシャが答える。

帝国軍は、主砲による攻撃を断念したらしく、戦車兵が砲塔から上半身を出し、小銃で応戦している。

先日の街での小競り合いで原始的な武器を使っていたレジスタンスだったが、この作戦では銃器や手榴弾を使っているメンバーもいるようだ。

「っていうか、どこにこんな武器を隠してたのよ。なんでこの間の戦闘で使わなかったの？」

サーシャは、半ば呆れた顔でソシユーに訊いた。

「俺たちは、テロリストではない。お前ら帝国兵と違い、少しでも街の人間に危害が及ぶ可能性がある武器は、街中では絶対に使わん」

「サーシャこそ、こんな事をして大丈夫なの？」

ディアナが心配そうな表情でサーシャの顔を覗き込みながら訊いてきた。

「うーん、正直言うと微妙かな。でも、このままディアナを帝国に渡しちゃダメなような気がしたの。それに今の帝国は、やっぱり間違ってる。だから……」

あなたたちの仲間になる。この言葉が喉に悶えて出てこない。やはり、まだ己の中に迷いがあるのだと、サーシャは実感した。

「ディアナちゃんっ!!!」

不意にキャロルの声が飛び込んできた。

キャロルは、ジープを駆ってベヒモスと併走し、徐々に近づいてくる。その横を側車付きのバイクで併走するアルの姿も見える。

「さあ！ 飛び乗って！」

三人が居る場所の二メートルほど横にジープをつけ、キャロルはそう叫んだ。

足がすくむディアナ。

「早くっ！」

急かすキャロル。帝国軍の反撃は、徐々に統率を取り戻し、レジスタンスはじわりじわりと数を減らしはじめていた。

「覚悟を決めろ、俺が先に行く！」

ソシューは、そう言うときャロルが運転するジープの荷台めがけて飛びうつった。

キャロルは、その衝撃でジープふらつかせ、そこへアルが変わりに滑り込んできた。

アルが運転するバイクの側車は、ベヒモス側についており、飛び移れる面積は小さい代わりにジープより小回りが利く。

「早く来いっ!!!」

ディアナに向かって手を伸ばし、アルは声を張り上げる。

「さあ、私も一緒に飛ぶから」

サーシャは、ディアナの背中をポンと叩いて励ました。

サーシャに励まされ、ディアナは彼女の顔を見てコクリとうなずくと、重たい鎧とバフコート脱ぎ捨てた。

アルは、更にギリギリまで幅寄せし、歩いて渡れる距離までバイクを近づける。

縁ぎりぎりに立ち、呼吸を整えているディアナを、サーシャは後ろから押し倒すような形で、側車に向かって倒れこんだ。

小さな悲鳴を上げるディアナ。

「アルさん、行って!!」

「よしっ!」

アルは、ハンドルを切って急速でベヒモスから離れていった。

「む!? あれは!」

双眼鏡で眺めていたナーシユは、かすみ始めた煙幕の中、ベヒモスから離脱していく側車付きのバイクを発見して叫んだ。

レジスタンスのバイクの側車には、帝国兵の姿。その下には、白いケープの一部と透き通るような金髪と猫耳が見え隠れしている。

「ほ、捕虜に逃げられているではないか! 逃がすなっ! 撃て撃てえええ!!」

隊列の間を縫い回るレジスタンスは、捕虜を奪還するための罠だったようだ。

それを悟ったナーシユは、唾を撒きちらしながら号令をかけ、それを合図にライフル銃を構えた衛兵たちが一斉に発砲した。

バイクを銃弾が襲い掛かる。距離があるため、そうそう当たるものではない。

歯噛みしながら双眼鏡でバイクを追っていると、側車に覆いかぶさっている帝国兵の背中から、ぱつと血花が咲いたのが見てとれた。「ば、馬鹿もん! 本当に当てるやつがあるか!!」

そう叫びながら射撃を制するナーシユを見て、ストールは「あなたが撃てと言ったんでしょ……」と呆れたように小さく呟いた。

結局、帝国軍は命令が統一されず、統制を保てないまま捕虜に逃

げられてしまった。

「なんとか逃げ切ったようだな」

アルは、バックミラーで後ろを確認しながらそう言って、バイクのスピードを少し緩めた。

「アルさん！ お願い、止めてっ！ サーシャがつー！」

サーシャに覆いかぶされたままのディアナが必死に叫ぶ。

ディアナのほうに目をやると、彼女に覆いかぶさっているサーシャの背中が真っ赤に染まっているのが分かった。

アルがバイクを止めると、後ろを追走していたキャロルが「どうかした？」と言いながらジープを寄せて止めた。

アルが側車からサーシャを降ろし、地面に横たわらせると、じわりと血だまりが広がった。

銃弾は、右の肩甲骨の下から鳩尾に抜け、クウイラスの内側で止まっている。その傷は、誰が見ても致命傷だと判断できる。

「サーシャ、しっかりしてっー！」

サーシャの手を握り、ディアナが必死に呼びかけた。

「あ……はは、嫌になっ……ちやうな……」

サーシャは、消え入る声でそう呟いたあと、血を吐きながら咳き込んだ。

「待って、今、治癒魔法をっ！」

そう言いながらディアナがかざしてきた手を握り、サーシャは弱々しく首を振る。

「致命……傷なのは、自分で……も、分かってる……」

そして、胸元から血が付いたロケットペンダントを取り出し、震える手でディアナに差し出す。

「これを……クレアの街……にいる、母と妹……に、渡してほしい……」

痛みに耐え、混濁する意識を何とか保ちながら、かすれた声でそう言った。

闇に支配されゆく視界の端で、キャロルが悲痛な表情を浮かべているのが見える。

「キャロル……さん」

サーシャは、消え入る声でキャロルの名を口にし、弱々しい微笑みを見せる。

「サーシャ！ だめ、逝かないで……！」

ロケットペンダントを握ったサーシャの手を両手で握り、ディアナは必死に叫んだ。

「お母さん……、ソアラ……、ごめ」

サーシャの瞳の端から、一筋の涙がこぼれ落ちる。そして、ろうそくの炎が消えるように、ロケットペンダントを握ったサーシャの腕から力が抜け落ちた。

「サーシャ……！ いやああああ……！」

サーシャの胸で泣き崩れるディアナを励ますように、キャロルはディアナの肩に優しく手を置いた。

「ディアナちゃん……」

「せつかく、分かり合えたのに……。せつかく、友達になれたのに……」

ディアナが流した涙が、頬をつたって顎から滴り落ち、サーシャの頬に当たって砕ける。

「ディアナちゃん。サーシャちゃんは私とアル君で埋葬するわ。あなたはソシユーと先にアジトへ戻って」

「でも……っ！」

「これは、俺たちを救出する作戦だったんだ。リーダーに俺たちの無事を知らせないことには、作戦の終了にならないからな」

ディアナの台詞をさえぎり、ソシユーが言った。

「そういう事だ。早く行け」

そう言いながら、アルはソシユーに向かってバイクのキーを投げ渡す。

「さあ、早く乗れ……！」

アルからキーを受け取ったソシユーは、バイクに跨るとエンジンキーを差し込んで回し、キックペダルを力いっぱい踏み込んだ。

ジーブに備え付けられているスコップを二本取り出したキャロルは、そのうちの一本をアルに渡し、荒野の乾いた大地に穴を掘りはじめた。

ディアナは、自分がこの場に残っても、何もやれることが無いと悟り、サーシャの命を救えなかった自分へのもどかしさを握り締め、涙を拭いて側車へ乗り込んだ。

裏切り（前書き）

Chapter 2の最終話になります。

裏切り

街の中を走行するのは危険と判断したソシユーは、街に入るまえにバイクを乗り捨て、郊外の下水口からアジトを直指すことにした。下水道に帝国兵はおらず、何の問題もなくアジトへ到着する。

普段、硬く閉ざされているアジトの壁が開かれていて、それを見たソシユーの顔に警戒の色がとる。

まだ、片手で数えられる程度しかここへ来ていないダイアナでも、それが不自然であることは理解できた。

片腕でダイアナの行動を制しながら、ソシユーは物音を立てないように注意を払って入り口へと近づき、壁に背中を張り付けたソシユーは、こつちへ来いとジェスチャーを送る。

ソシユーが中を覗き込むと、いつも番人をしていたレジスタンスメンバーが、うつ伏せに倒れて死んでいた。

「っ！？」

それを見て、思わず節句するダイアナ。

首筋には黒ずんだ小さな傷があり、苦悶の表情を浮かべた顔は、茶褐色に変色している。

死体はそれだけでない。アジトの中には、他のメンバーの死体も転がっており、その全てが同様の状態だった。

「毒……か？」

静かにゆっくり、音を立てないように中へ進みながら、ソシユーはそう呟く。

広間には、ウォルターやソニアの死体も転がっていた。

そして、ニコだけが椅子に座って足を組み、にこやかな表情で二人を出迎える。

「おかえり。遅いから心配しちゃったよ」

ニコは、いつもの軽い口調でそう言った。

「ニコ……、いったい何があったんだ！？」

「見て分かんない？ みんな死んだのさ。オレが殺した。」
にこやかだった笑顔が、だんだん悦に浸った歪んだものへと変わっていく。

「あんなに偉そうだったリーダーなんて、あっさり死んじゃったよ。ははっ！ ソニアなんて、もっと見ものだったぜ？ あの女がオレに好意を寄せていたの事は、前々から気付いていたからね。最後まで信じられないという顔で死んでいったよ。オレにすがり付いてねくくく」

そう言いながら、ニコはいつも嵌めているグローブを脱いだ。

「どうして！？ どうして、そんなことを！？」

ディアナが叫ぶ。

「どうして？ マジで言ってるの、お前？ そんなの決まってるじゃない。オレが帝国の人間だからだよ。帝国の特殊作業員。それがオレの本当の姿。スパイとしてレジスタンスに潜り込んでいたのよ。手配中の小娘が転がり込んできたときは、本気で驚いたぜ？ オレにもツキが回ってきたってな」

「貴様っ！！」

逆上したソシユーが殴りかかった。

「うおつと、あぶねえ！」

ソシユーの攻撃をひらりと避けたニコは、右の手刀をソシユーのわき腹へと突き刺した。

「うぐっ！？」

「ソシユーさんっ！」

ニコは、ソシユーのわき腹から手刀を引き抜く。指先は、根本までソシユーの血で真っ赤に染まっている。

ニコの手は、指の根本から手首までは、浅黒くに変色していた。

「毒手といってな、毒虫や毒草をすり潰したものを入れた瓶に手を突っ込んで、長い年月かけて毒を強くしていくんだよ」

自分の手をディアナに向け、恍惚な表情で説明をした。

ニコにわき腹を突かれたソシユーは、うずくまってくる悶絶して

いる。

「この毒は、即効性だね。早く解毒しないと、そこいらに転がって死体の仲間入りするぜ？」

そう言いながら、ニコはニタリと笑ってみせた。

急いでソシユーのもとへ駆け寄ろうとしたダイアナだったが、その行く手をニコが遮る。

「へへっ、そうはいかないぜ？」

「私たちがナーシユ將軍に捕まったとき、どうして救出作戦に協力したんですかっ!？」

自分が帝国の手の内に落ちたのなら、レジスタンスに協力などせず、そのまましておけば良かったはずである。

「そりゃ、近衛將軍だけじゃなく、陸將まで出し抜いたとなりゃ、お前さんの価値がぐんと上がるだろ？ それを捕らえたとなりゃ、かなりの恩賞が期待できるじゃねえか。一軍の長なんてのも夢じゃねえだろ？」

まるでダイアナを馬鹿にするような口調で言った。

「そんな事のために……っ！」

「ほら、大人しくオレに捕まれば、そいつの治療をさせてやるぜ？ このままではソシユーが死んでしまう。だが、この状況で彼の治療は不可能だ。かといって、ニコに従ったところで治療をさせてくれる保証もない。この男を倒すという選択肢もあるが、それまでソシユーの命がもたないかも知れないし、一撃で仕留められなかったら、ソシユーに危険が及ぶことが目に見えている。まさに八方塞の状態だった。」

「ほら、どうした？」

そう言っつて、ニコがダイアナに近づいたとき、

「うおおおおおっ!!」

いつの間にアジトへ来たのか、物陰に身を潜めていたアルが飛び出し、掬い斬りを試みた。

咄嗟にテーブルを蹴って、間合いを狂わせるニコ。

「こいつは俺に任せろ」

そう叫ぶと、アルは再びニコへと斬りかかり、ニコからディアナから引き離れた。

「アルさん、その人の手には、毒が塗られていますっ！ 気をつけて！！」

ディアナは、アルに毒手のことを告げると、うずくまって苦しんでいるソシユーのもとへと駆け寄った。

「邪魔だ、外へ連れ出せ！」

治療を始めようとしたディアナに向かって、アルが怒鳴る。

ソシユーの腕を自分の肩に回し、担ぎ上げようとしたが、重たくてびくともしない。彼も身体がうまく動かないようで、ただ苦しそうな呻き声をあげるだけだ。

すぐ後ろでは、アルがこちらを気にながらニコの猛攻を防いでいる。

焦るディアナ。肩に掛かっていた重量感が不意に軽くなった。

「ディアナちゃん、急いで！」

気が付くと、キャロルがソシユーの反対側の腕を担ぎ上げていた。どうやら、アルと一緒にアジトへ来ていたようだ。

キャロルの手助けを得て、壁を開くための鉄製ハンドルがある場所まで退避させると、ディアナはすぐに治療を始める。

ソシユーに両手をかざし、体内を巡っている血が浄化されているイメージを強く念じる。手のひらが光を放ち、その光がソシユーを包み込む。

ソシユーの呼吸は、少しずつだが落ち着きを取り戻していった。

背後の様子を気にしながら戦っていたアルだったが、ディアナたちが退避してくれたおかげで心置きなく戦えるようになった。

「遊びは、ここまでだ」

ニコと間合いをとると、アルは右半身の前屈になり、剣を左肩に担ぐように構える。

「毒は、なんとか取り除きました……」

額ににじんだ汗を拭いながら言うティアナの表情は、どこか沈んでいる。

「ソシユーの様子はどうだ？」

そこへ、アルがやってきた。

「ニコは？」

「死んだ」

キャロルの質問に、一言だけ答える。

「うう……」

気を失っていたソシユーが、ゆっくりと覚醒した。

「大丈夫ですか？」

「何がどうなった……？」

まだ意識が混濁しているようだ。

「あなたは、ニコの毒に倒れたのよ。それをティアナちゃんが治療してくれたの。アル君がニコを倒してくれたわ」

「そうか……」

そう言うと、ぼやけた頭を振りながら立ち上がるようにする。

「っ！？」

下半身がいう事を聞かず、再びそのまま倒れこむソシユー。いう事を聞かないというよりは、全く感覚がないと言ったほうが正しい。「ごめんなさい。身体の毒は取り除けたのですが、治療を開始するまでの間に下半身の神経が毒によって破壊されてしまっていて、今の私には治療が出来なかつたんです……っ！」

「……………」
自分が置かれた状況を飲み込み、ソシユーは落胆の色を隠せないでいた。

「もう行くの？」

キャロルの家、アルに間借りさせている部屋の壁にもたれ掛かりながら、キャロルは荷物を纏めているアルとティアナに聞いた。

あれから五日、アルとディアナは、旅の準備を進めてきた。

「はい。これを届けるって、サーシャと約束しましたから」

死の間際、サーシャから渡されたロケットペンダントを見つめてディアナが言った。ロケットペンダントを開くと、そこには彼女が自分の母親と妹と三人で写っている写真がはめ込まれていた。

「クレアの街までは、かなり遠いわよ？ 隣町まで送ってあげましようか？」

過ごした日数は少ないが、キャロルはそれでも、ディアナやアルと別れるのが惜しかった。少しでも二人と一緒に居たいから、そう言ったのだ。

「いや、必要ない。あんたは、レイクやソシユーの傍にいてやれ」
ぶっきらぼうに言ったアルだが、彼なりに気を使ったのだろう。

下半身が付随になってしまったソシユーは、あれからふさぎ込んで部屋に閉じこもっていた。

もともと身寄りが無かった彼を、キャロルが自宅に招きいれて世話をしているのだ。

「大丈夫です。ちゃんと準備もしてるし」

「そう……、なんか、気を使わせちゃったわね」

キャロルは、さびしそうな表情を浮かべながら言った。

「いや、俺たちも世話になった。旅に必要なものも、あんたが揃えてくれたしな」

そう言いながら、アルはカバンのファスナーを閉じて背負った。

「では、そろそろ行きます。レイクとソシユーさんによるしく伝え
ておいてください」

キャロルが用意してくれたショートソードを腰に下げ、ケープのフードを目深までかぶって言うディアナ。

「近くまで来たら、かならず寄ってね」

「はい、必ずっ！」

「二人とも、元気でね」

「あんたもな」

そして、ディアナとアルは、キャロルの家をあとにして、クレアの街へと向けて旅立っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4906x/>

ジェノクレスの遺産

2011年11月20日19時46分発行